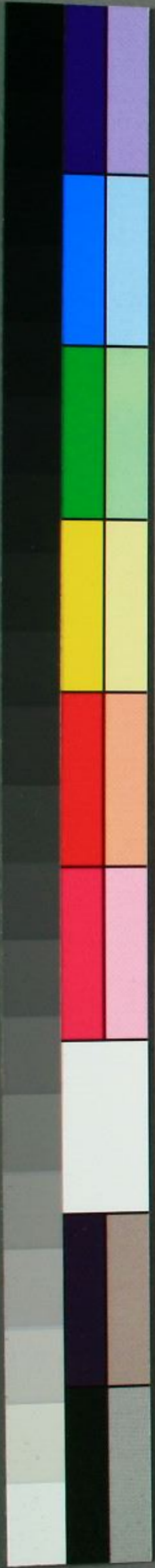


A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



生市  
啓蒙知惠乃環

1498  
1



5

10

15

20

三奴  
1498

啓  
蒙  
智  
慧  
之  
環

於菟子譯述

瓜生氏藏

題首



余屬官文部与瓜生君  
為同僚同与議學制余  
目不識洋字每有考西  
歐法國之制必積之君

君問出亦其所謬述啓  
蒙智德懷方是受亦小學  
生徒宜讀也支那之書  
迂濶無實際其文難明  
我邦人所譯洋書文義

多歧晦澀不明了是乎文  
至近理至要尤為今必  
用因急從速刻之以惠  
天下小學生徒始聞知  
發蒙之功豈止小學生

徳也哉

明治壬申三月又部少丞

撰り



啓蒙知恵の環巻の

於菟子

譯述



第一篇 總論

第一課 物の論

團の石一部の書一株の木一羽の雀一匹の馬  
一本の剣一片の葉一張の椅子一點の星一種の  
冠等の如きいとなく人の目に見ゆるものにて  
之と名づけけり物と云ふ其中に椅子針書冠等の  
ものハ人の作つてあるものなり之と人為の物と  
いひ木雀馬葉星等ハ人の住る所より生ずるもの

大正二年三月廿一日  
長谷川誠也

天地の自然に出で天神の造り玉たま一ふところなりことごとと天造の物と名づく

第二課

天造の物及び生物の論

凡そ天の造る物の中に生るる物と生なき物との別あり馬うま雀すずめ木の類るいは生るるものにて之と生物といひ星の類は生なき物にて只ただ石の類は生なき物にて只ただ



れと物と云ふべく生たる物とハ稱なづまざる

第三課 人類の論

人類ハ天造中の生るる物にて最も勝れて貴きものなり故に万物の靈たまとも申まをすなり形体かたちより靈魂たまより次第ついで長ながく一歳前後いちさいぜんごの幼童わらわといひ二十歳にじゅうさいより成人おとなといふ但たゞ身体からだの長大ながハ極たぎる處ところあり心こころ智ちの大小おほなるに至いたつてハ益えきく進すすんで遵養そんようするまれば極たぎるま事ことを曉さとり事ことと評ひらん物ものと愛あいするまハ皆みな方かた鬼まのまりま故ゆたり

且くハ能是非と分別も事と得る物にて諸物  
に超へて其行ふ所の事皆必ず神明の照覧あり  
所あり此旨ハ我  
皇國よくら上古開闢の始りよ於て早く教へ示  
玉へり

第二篇 身体の論

第四課 首の論

人の身に白体ありて其最も重なるものハ首  
ホして次ハ腹背次ハ手足なり首ハ總身の上下  
ありて頭と顔の二箇より成る頂額後頭額顔の

類ハ皆な頭の内にありて内ハ脳髓あり外ハ蓋あり  
髪あり以て之と守護も頭の前ハ即ち顔なり

第五課 顔の論

顔の内より眉の骨なり目なり頬なり鼻なり  
唇なり額なり眼ハよく見よ眼ありて開閉  
鼻ハよく嗅ぐ内に兩孔あり鼻の孔ハ唇ハ  
言ひ食ふ為の用なり此物さへめく屈撓易  
故に歯牙ありて内より支へ以て内へ落さぬ  
うにまろかり

第六課 洞の論

人の身の最も大なる處は胸と背と其部位を合  
ちてつゞきつゞきハ肩胸兩角腹背腰なり胸の上  
と背といひ胸の兩旁と脇といふ脇骨ハ胸の背  
の二骨に相つゞなる物の内ニハ心と肺との臓  
あり其下部ハ即ち腹なり腰なり

第七課 上肢の論

身の正肢と分て云ハ腕といひ腕といひ手  
といひ指といひ腕ハ肩と以て胸に連り腕ハ肩  
に連り手ハ手首にて腕に連り指ハ手  
節にて手はつゞなる人といハ腕兩腕兩手十指

より手の内と掌といひ手と捲と拳といふ

第八課 下肢の論

身の下肢より腿より脚より足より趾より腿ハ  
腰に連りて脚ハ腿よりつゞなり足ハ脚ハ趾ハ  
足趾ハ足に連りて入るに兩腿兩脚兩足十趾の  
り足の後と踵といひ足の上と趾といひ足の下  
と趾といふ

第九課 骨節の論

人身の部位をなすは活動するものなり其動  
處ハ乃ち骨の節あり肩腕手頸脚膝頭脚根の







持ちよく打ちよく牽きよく行きよく走りよく  
 飛びよく躍りよく立ちよく坐りよく臥しよく  
 く見よく聴よく嗅ぎよく味びよく感よく笑  
 ひよく嘆きよく泣きよく叫びよく唱ふ而して  
 手の用よなまハ最も多し

第十五課 人の齡の論

人生れて初年と嬰孩といひ能く歩よく言  
 まると小兒といひいづれも顔よく料簡あるを  
 幼年といひ身もぐよ十令生長したると成人の  
 時より力衰へ手足弱きに至りてハ則ち之と老

年とツふなり

第三篇 飲食の論

第十六課 肉食の論

身ノ康健ノ保えんしにハ飲  
 食より第一ナル人の食物に  
 宜しきもの甚だ多し中に就  
 て獸肉と最も一とを牛子  
 牛羊子羊豚の肉と第一と  
 鹿山羊兔等の肉も亦と食ふ  
 べし又た肉ハ煎トケ羹汁と



もなもべー

第十七課 其二

鳥類と魚類とも亦食むべきもの多くて本邦  
 魚と食むる最も多し水土地勢のま  
 りも多し鳥類の中にて鶏家鴨七面  
 鳥鴿雉山雞鷺鷥の類其外尚多し水族のうち  
 て鯛鰈松魚鯖比良目鯉鯽鱒等も食ふ  
 べし介類にて蟹蝦蛤蜊蠣又魚鱉の肉  
 も食ふべし

第十八課 野菜の論

蔬菜も亦た食となすべし其葉と食するもの  
 り菜の如きは是なり其莖と食するもの  
 茹の如きは是なり其根と食するもの  
 蒟蒻根烏芋芋の如きは是なり其子と食するもの  
 の如きは是なり其葉と食するもの  
 瓜の類は是なり又其莖と食するもの  
 花菜の類は是なり

第十九課 穀物の論

穀類の食に供する者亦多し米麥  
 粟黍稷等ハ其最なる者なり米ハ本邦  
 勝りてよく出来日ハの食とも  
 するものなり諸穀とも皆挽きて

と作り其細なる所と篩ひ取りて糖餅茶餅煎餅  
と作り其粗き皮ハ家畜と養ふに用ひまき子豆  
膚と作り麥と菽と豆と豉醬と作るに殊に夥  
し

第二十課 菓物の論

食ふべき菓類甚だ多し橘柑梅柿桃李梨林檎等  
よー一粒とし珠とカキと柿のハ葡萄覆盆子ハ類  
是なり肉の内ニ核あるものを梅挑の類ハ皮  
の内ニ肉と截しそのを杏仁銀杏胡桃栗の如  
きたり人の脚ニ乾し貯ふるものハ櫻桃菓葡萄

葡萄栗椎等の類多し梅橙大林檎梨柿を殊に有用  
の菓よーく諸方より多く採るものあり

第二十一課 味と調ある品との論

食物のうちハ淡きものハ塩と以て味を調ふ又  
砂糖蜜糖蜜と以て甜きものあり或ハ酢醬薑茶  
粉胡椒等と用ひて物の味を調ふるものあり肉豆  
蔻丁香荳蔻花山椒肉桂胡椒等ハ名づけて香料  
と云ふ多しハ熱地の國より來るなり

第二十二課 食の論

人の食とならば飢を救ひ身と養ふ為なり其始



一若干の費とついで培養を  
 此を以て其功を成すものな  
 りけり大に農業を為すもの  
 ハ多く傭くと灌漑既に収め  
 取つて穀物となれば之と市  
 に出して賣るなり

第二十五課 其二

農家又左牲口と畜ふ馬ハ犁  
 耙と挽き重荷と負ひ車と拖  
 く為なり牡牛も亦挽負の事



よつらふとも阿れど多くハ羊豚杯と同様ニ賣  
 物とくるなり牝牛ハ乳と取ら其乳にて白牛酪  
 と干牛酪とを製をミ一雞鶩の類を卵とつり又  
 料理して食する為あり

第二十六課 食物と備辨の論

食物も固より百姓は由て出来たりものなれど  
 亦百姓より直に得るものあり又必ず食物と  
 備辨するもの手と経ざるものも有るを播屋あり  
 て米と煮あげ水車屋ありて粉と造り蒸餅屋あ  
 りて蒸餅とつくり素麺屋ありて麵類とつくり



りり

第二十九課 婦人の服飾の論

婦人の服もそのハ被髪紐袖廣手細襦袢腰衽  
腰衣收引脚半足紐足袋等猶多くは其飾ハ簪  
耳環風冠腕環足環の類なり本邦にてハ男女と  
衣服の作り方畧相同ト西洋にて其殊なる  
と甚

第三十課 衣服よ用ふる品の論

衣服と製するの料多くハ絲麻羊毛皮革棉花  
用ふる棉ハ印シ亞弗利加亞墨利加は多くキ一麻

ハ比利時阿爾蘭魯西亞等の  
國ハ生を本邦にも綿麻と産  
程よと多一唯外國ハ賣出を  
より剪取するなり絲を本邦の  
名産として蚕の吐き出をも  
らる近來發賣して外國にも  
輸出するものみな右  
の諸品と用ひて種々の織物  
と作る





居るべき所の理

第三十二課

衣と製するく手の論

衣服と製するは、造る本より多くの人工と経  
たり、今婦人の仕事は衣と製するは、小布帛と用  
るも其布帛を蚕桑して絲と繰り又を綿花と摘  
して縷と成し機杼と以て織りたり、裁縫する  
は、何たりても又、鉸剪懸針縫針等を用ふ其品  
ハ皆夫々の職人の手と成るなり、鞋匠の革と  
用ふるは獸皮先づ皮匠の手と経て毛と去り揉  
て革とし、韋とし、てききり、始めて靴を用ふる  
と得るなり

第三十三課

身と潔くすべきの論

若し身の康健なると欲するなり、を必す常は身  
を清くすべきあり、不潔ハ病を生むる本なり、人  
ハみな毎日浴して乾きたる、海綿又ハ手拭にて  
よく体と磨り肌着を体の蒸發氣と吸込むもの  
ゆゑ、まじく之と取り換ふべし、居室ハよく洒掃  
し、空氣と通をべし

第五篇

居所の論

第三十三課

房屋の論

人の居る所を穴なり、天幕あり、廬あり、屋あり、多

居るべき所の理

居るべき所の理

居るべき所の理

くハ皆屋ヲ居ニカリ屋の小カラスと令トツヒ高  
く廣きものを邸第トクハ屋の内チ分チて内室  
外堂玄關客廳書房厨所地窖等トツハ廊下梯等  
トクテ上下左右ニ相通ス

第三十四課

屋ト建ス材木類ノ論

木石煉化石瓦石板石灰鐵銅鉛硝子トクハ屋ト構  
ヘテノ諸材ナリ木ヲ樹林ヨリ出テ石ト石板ト  
石礦ヨリ出テ煉化石ト瓦ハ粘土ヨリ造リ鐵鉛  
杯ハ金礦ヨリ出テ石灰ハ石ト煨キ或ハ礬  
殼ト燒テツクリ玻璃ハ硝子屋ト作ナリ

第三十五課

ノ業ノ論

ノの世ニ居ルヤ互ニ身の勞ト分チ合フテ彼此  
相資スト常トモ故ニ食物ヲ作スもの所リ衣服  
ト製スもの所リ器械ト造スものあり銅鐵ハ  
銅ト以テ燭臺燈鐺子等トツクリ陶工ハ坭ト以  
テ杯碗碟等ノ陶器トツクリ鍛冶ハ鋼鐵ト以テ  
種々ノ刀剪トツクリの類々相須テ互ニ生養  
ノ用トナマナリ

第三十六課

屋ト建ツル小入用ナル職業  
ノ論

家屋と造るよ入用の職業数々あり其習ふと其  
の業各々同トウトビトシ皆相預て其  
事となすもさるるなり石坑匠ハ煉化石を以て牆  
を作し石匠ハ石を築合せ木匠ハ屋根と構の床  
と作し屋根師ハ板石板瓦を以て屋根を葺き張  
物師ハ紙を以て張貼とす玻璃匠ハ硝子を窓  
扇に葺め坑匠ハ石灰を以て牆及び天井と塗り  
油漆匠もさるる木の木材に漆を塗る

第三十七課 家什と作る者の論

家内の什物も亦多くの職人の手よく仕るなり

差物師ハ棹杓椅子牀蓆寄扇字檯等の物をつくり  
り假治屋ハ種々の鋳器をつくり錫匠ハ諸般の  
錫器をつくり其外恸帳襦袢簾疊帝羅壇等の  
の作りたるもさるるを専ら其業を習ふとの有り  
て用と便もさるなり

第三十八課 受負人の論

家屋と建る管業の事と受負人にて承校する  
の事受負人又ハ差配方といひ又棟梁とす其  
くよく石匠坑匠木匠及ひ諸件の工匠を確  
集めて夫々の事業を都合し家屋を造立し居

住と全備せしむ

第六第 教育の論

第三十九課 學校の論

書と讀く字と寫ハ第一有用の術なり以年の時  
ハ尤も學ハやましす是故よくの父母たるも  
のハ兒女と育つるよ必も學校に送りて誦讀書  
寫等の事と習ハ一む學の道ハよく氣と附く  
とよく強忍するとの二つと貴ぶ故に弟子ハ必も  
勉強と第一とモ師匠ハ嚴かなるを以て是故  
ハ學生ハ宜しく後順ハ一て之と習ふべし

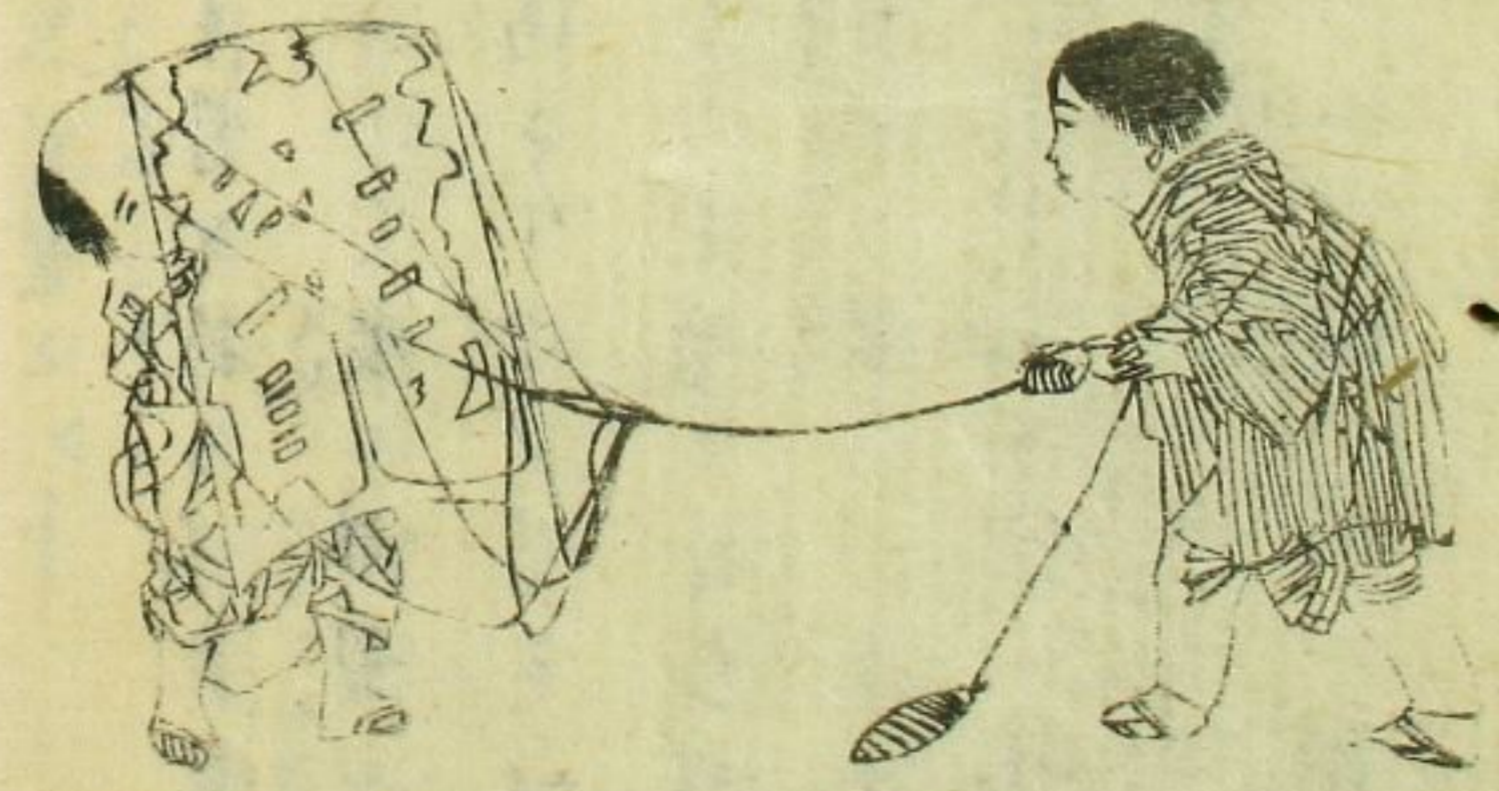
第四十課 學問の論

學問と成さんとするも必も骨を折るべし  
く書と讀まんとするも慢声にて度々温習を  
要もよく手と習ふよ多き多く寫き心と尽くべ  
し悟らんとする間とらると讀とらると  
事ハ宜しく考へて疑なき一算數と學ハ書と  
よみ字と習ふより難し然れども甚だ用とな  
るも多し必も習てねがなりぬ事なり此事遂に  
多きものと思ふべき程ぞ力と尽き時ハ世に能  
くする者ハなきあり

第四十一課 童子玩遊

學問の論

學校より有りて學問する者ハ  
放學玩耍の時あるべし其  
所そびる打毬捉山鷄秋千抽  
陀螺盲公捉啞姥猛獸取蛇子  
跳躍放鳥等のこと都て害な  
きの要遊なりハ身体と壯健  
にきくし勤むればしき遊び  
も樂しけれ故に玩遊と樂ま



人と思ひて學問と務むるハ  
寒國にて冬天下るれば水  
の上は氷或ハ走り或ハ滑走  
して遊ぶなり

第四十二課 女子の玩

要の論

女子の玩耍ハ童子と異なり  
く執九子藏金雞剪公子執皮  
加敷築毬打燕等の事にて相  
ともり遊む甚だたの故



互に湊りて愉く遊び自らも樂しむ同伴と  
嬉しむ

第七篇 乳養動物の論

第四十三課 動物諸類の論

呼吸をして動く者ハ皆動物なり其内次第ニ生  
長して大きくあるもの多く又よく物と感  
じしもの多しは獸をよく走りしな四足と具ハ毛  
或ハ鱗あり其身を蓋ふ鳥ハよく飛び毛と具  
ハ其体と蓋ふ魚ハ翅鱗と具へてよく水と行  
ぐ爬虫を或ハ陸に居り或ハ水に居る蛙蟻龜龍

の類あり小虫類を足ハ本組の類ハ足なき物な

第四十四課 乳養動物の論

凡そ初生する乳を以て哺養ふもの此と  
乳養動物と云ふ即ちく獸鯨江豚等の如きもの  
皆な是なり人ハ二手ニ足有り獼猴の類も手四  
本ありて足有り獸も多く四足ありて手あり象  
ハ鼻の端を扱ひて手の用とあり

第四十五課 家畜の論

人の養ふ獸と名づけて家畜と云ふ中にも馬ハ

驚駭おどろこしや倦うけ人の用とつとほるも多おほく犍牛けんぎう  
ハ勞ろう力りきてよくつとめ牝牛めいぎうの用ハ甚し多く綿羊めんぎやう  
多おほく馴なれてやさしく犬いぬもよく家いへを守り猫ねこハ  
く鼠ねずみ捕とらふ子馬うまこ子牛ぎうこ子羊ぎやうこ子犬いぬこ子猫ねここの類るいも亦また  
多おほく玩耍あそびをこのむ山羊やぎ豚ぶた驢馬ろまも亦また家畜けちくの  
内うちなり

第四十六課 殘殺獸の論

余あの動物どうぶつと殺ころすく食くふものも殘殺獸あつさりものとつと多おほ  
くハ野山のやまノ店みせふなり其中そのうちに獅しと最ちよも強つよく  
市いちと殘賊ざんざくのものもくく豹ひょうと猛烈めうげつきものもくく豺狼さいらう

ハよく食くをむきざるものに  
く狐狸きつねハ狡猾くわうかくとの熊くまハ勢雄せゆう  
此こゝらの野猫やねこハ兇暴けうぼうとのなり  
此外物けがしものと殺ころすく食くふ獸けものの属ぞく  
猶多なほおほく

第四十七課 野獸の論

野獸やぶつハ林下りんか曠野くわうや平原へいげん山嶺さんりやうの  
間あひだに棲すむなり其中そのうちに野猪いのししハ  
果敢こつことの鹿しかハ雅おとよくさとのあ  
り其外けがら野牛やぎうハ猛毅めうぎとの斑驢ばんろ



ハ全身黑白の筋ありその象ハ大いあるとの別  
鹿を力つよくしてよく事耐へ長遠在ハ身の  
丈高く且つ馴やましく羚羊の類を疾走するものな  
り是等ハいなあにハ希なるものなり其  
草菜と食ふの獸なり

第四十八課 其二

狸ハ獬莫と好むもの鬆鼠ハ快捷との山兔ハ臆  
病のものを鷄ハ最も小なり者老鼠ハ残害をな  
海狎ハ慧ハ精水としての獼猴もくしやみく  
よくくと笑ハハ此等ハ草穀物木の實及

び草木の根葉をくくふものなり獸の人の用と  
なりハ或ハ之を食料となり或ハ衣服の用不充  
て或を勞役ふつふなり

第四十九課 獸の身と覆ふ物の論

獸の其身具ハ衣ハ代ハ一ハ体と蔽ふとの各々  
同トウダギとなり綿羊の毛ハ柔うはハ豚の  
毛ハ針の如く牛馬駱駝鹿山羊の類ハ其毛とな  
髪毛のくく田鼠猫狐狸鬆鼠貂等ハ其皮裘とな  
くく豪猪と猬とハ毛刺棘の針のど馬獅野  
牛の頭の毛長くして鬣となす





一 獸夜出て食と尋ぬ者ハ昼ハ多ク深林巖  
 穴の間ニ藏る

第五十二課 獸の居處の論

鼠子、老鼠、狐狸、田鼠等の獸、地ハ穴とけりて居  
 り、鹿、猪、野兔等ハ林中、小草と藉きて卧し、鬆鼠、獾  
 猴、木の上ニ居り、海狸ハ窄ニ河の旁岸ニおろ  
 て、巢と住ると、屋の如し、獸の臥る處と獸棲し

第五十四課 獸各習作の論

獸齒、いろく、一、飽、く、大、ひ、な、る、もの、ハ、菜、草、と、食

齒の火りたる者ハ余の物  
 と殺し、食するあり、蟲と喰  
 ふ、獸あり、草と喰らふものハ  
 象の身体ハ硬、脚ハ重、  
 故に足も強く、太く、脚て之と  
 芝、海豹も身の脇ニ蒸氣、  
 の外車の如きもの有りて、  
 く水と游ぎ、猫も足に爪と具  
 へ、又足の裏ニ軟らゝなる胞  
 有りて、行き歩む音となさ



啓蒙和意の衆 卷之一 二十

第五十五課 類と以て聚る獸の論  
水牛、綿羊、ハ群と為して遊行且つ食を求る。山羊、麋羊、高山に居り冬のはら幼鹿、鹿と相聚りて其保護となり。野猪、ハ子とひきつきて其長大あるを待て後、相離る牛ハ敵に攻らるる時を羣となして互に相保り。野豹も羣をおきて他の物と獵り食ふ。

第五十六課 人の為る勞に服する獸の論  
人のためにつゝ、これに役に服する獸甚多し。馬

を車と挽き重荷を負ひ亦人の騎るに使する。犬ハ、夜に守り牡牛も亦荷を負ひ田を耕し。駱駝ハ其性勤忍つゝ、死をのふて熱き沙漠の中は速く重き貨負ふて行き驢、馴鹿象の如きも亦皆人の役とつとむる物なり。

第五十七課

人の食となる獸の論

蹄甲ニつゝは破れて其性、菓菜と喰ふを常とし、喰ふて後、又草を翻して再び喰む。獸假令ハ牛、綿羊、山羊、鹿等の如きものハ其肉至つて人の食となす。よる、熊、家兎、野兎の如きも亦其肉を食

ふべし獸の子を都て其肉甚ぞ柔軟なり又之を食まると時もあり

第五十八課 其二

亞非利加之土人を獼猴の肉を食ひ阿非利加人ハ象獅犀虎河馬の肉を食ひ亞細亞歐羅巴の州内までも或ハ馬の肉を食ふ國も多ク有り地球北極の處にてハ土人好んで鯨膏及び海狗の肉を食ふ

第五十九課

くの衣服に供せらる獸の論  
綿羊の毛ハ靴下羅羅羅織り獸トシテ其

皮と裘となし上着帽及び手套等の物を作る  
べきものも多ク山羊のとき獸ハ其毛長織り  
各般の衣裳とつるべし獸の皮ハ其毛と剥去  
り革となり鞋を造るべし海狸兎の皮を高  
帽とつるべし

第六十課

獸の雜用ニ給ふる論

象と海馬との牙を多く人の用となし諸般の玩  
器を作り鋸匠諸獸の大骨を以て鋸著等作り  
獸の角ハ諸々の器に用ひ馬の毛ハ織り褥蓋と  
かし鯨魚海豹よてハ燈不用ふる油と製し獸の

角と甲との骨ハ膠となし其膏ハ蠟蠟と製さる

第八篇 鳥の論

第六十一課 鳥の總論

凡そ生物の蛋より出たものと卵生の動物と名づく鳥小虫等の類皆然り鳥は嘴羽翼尾足あり趾は爪あり喉の下に臍肝あり鳥類は冠と具まざるものあり鬃髻と具まざる者あり地不行ものあり樹を攀るものあり枝に棲むものあり水を遊ぶものあり

第六十二課

鳥の類と具小まざる論

鵠鷹鷂の類は生物と捕へ食ふ啄木鳥鸚鵡ハよく木を攀ぐれども地と行は便なざるを鶏の類はよく行き走れども高く飛ぶところを鴈鳥と鴈鳥ハ走る事甚く速なり長き脚の鳥ハ多く水澤と涉り掌の足はよく



鳥の類と具小まざる論

水と游ぐなり

第六十三課

鳥の性も異なり

鳥鴉々羣とあし巢と構へて同居し鶯鳥の如くハ嘴啄硬く交喙雀ハ松の實と扱て食ひ燕子よく蟲と食ひ啄木鳥ハ啄みて木の皮と剥き蟲の類と驚おのしと搜し食ひ鴉鳥ハ夜を待て出て物と捕へ杜鵑ハ他の鳥の巢に己ガ卵をうす棄る

第六十四課 其二

馳鳥ハ走ると馬の跑るが如く水と涉る鳥ハ頸

長く鴉鴉ハ蛇と捕へ海鷲ハ

海鳥の至る人なるもの神鷹

々飛と甚ど疾く彈翹鳥を走

るとと放ぐとも共に難く

く飛ぶるとと得手と一途鴉を

翼小にして行くに難く游ぐ

と得手とま

第六十五課

鳥の羽の論

鳥の羽ハ長短大小種々あり



鳥の羽の長短大小種々あり

く一様なるに音輕く柔に〜且つ強し鳥の中  
小雁コガンは羽のものをけり 雉チ山鳥ヤマトリ孔雀コウキョウ鸚鵡インボ蜂雀ハチウソウ風  
鳥トリ等トウ是コトなり鳥トリを毎年毎年其そのあつて羽はねと脱ぬ去きり復また  
新あらたしき羽はねと出でるををとと執とつつななま

第六十六課 鳥の巢の論

鳥トリを巢ネストと造つくりて 蛋たまごと産うむ覆おほ翼よくして子こと出でる其その巢  
と造つくる料けつ一様いつじやうなりをを皆みなと以もつてもる 木の枝  
枝えだ以もつてもる 何なにを棉わた草くさ等トウと以もつてもる 小鳥  
の中なかこハ巢ネストと藩籬はんりきと作つくるあり其その作りつくり方かた甚こゝろた工  
雅みやびなり燕つばめ子こ 簞たな一いつル作つくりて 鮎あし鳥トリハ池いけの中なかに生なて

別に巢ネスト々々々々鷗ウ鳥トリハ高たかき巖いわと巢ネストと構かま海鳥ウミトリハ濱邊ハマノヘ  
の山岸ヤマノヘと造つくるなり

第六十七課 鳥の聲の論

凡みなを鳥トリを名なくて 声こゑと發はる物ものは其その声こゑ存ぞん同どうトカ  
らも鷄けい公こうの聲こゑハハツツウウととツツハハ鷄けい母ぼの聲こゑハ  
ココといいひ鷺ろの聲こゑハカカククととツツハハ又また吹ふ虚きょととな  
又また大おほ声こゑと發はるて 叫こゑび家鴨けいあひの聲こゑハギギヤヤとと  
ハハひひ越こハハホホくととツツハハ燕つばめの聲こゑハハビビイイくととツツハハ  
鳥トリの喜こゝろくて 鳴なむのハハ百ひゃく古こ畫え眉まゆ等トウカカリリ鳥トリハ春はるこ  
當あたりて 始はじめてよく鳴き出るあり、

鳥の聲の論 第六十七課 鳥の聲の論 二十

第六十八課 鳥の時と隨て地と移る論

時と隨て地と易へ居どころと移る鳥何れ燕杜  
鵲の如きハ春天此地不到りて秋ハ暖邦は往  
き冬とまきて又た來る鴻鴈雁鴨の如きハ秋此  
地に到り冬と凌ぎ春の暖なる不臨して又寒  
邦とゆく地を易ふる為は往來もまたハつたり  
大海大地と通りまぐるなり

第六十九課 鳥の足と用何る論

鳥の肉は食ふべきもの甚ぶ多し鷄家鴨鵝山鳥  
雉鳩山麻雀等ハ食物に至てハ家鴨鵝山鳥

毛と羽ハ牀蓐の内よりハく鶴の羽の大なる  
ものを其管と削りて西洋より筆となを若し  
細字を写し或ハ繪と畫くハ老鶴の羽管と用

第九篇 爬虫と魚との論

第七十課 爬虫の論

爬虫を魚と同じく其血紅しハ冷なり鳥獸  
と同じく歩都て爬虫を山陸にも水にも居る  
この水來るもの多し其内脚はるものを蟻蟾蜍  
蜴鱷魚龍等の如きものなり脚なくハ腹行を



たつた 諸蛇の類なり 蛇の中は毒ありき  
の必なるべし

第七十一課

爬虫各異なる處り論

爬虫其皮の光滑なるもの有り甲を以て身を  
蓋ふ所の有り其甲を堅固あるは推のくよく  
外を防ぎ内を守り中にも亀の甲を甚と硬し海  
亀は玳瑁と名するもの有り甲麗しくして梳簪  
等の品を作ると又脚魚と名するもの有り其  
肉甚と味有り蜥蜴ハ多く性質良きものはて害  
をなすと云なく甚ハ温るなる雨のくく後

多く出

第七十二課 魚類の論

魚ハ海河溪湖に處るなり身  
の皮光滑なるもの有り鱗を  
以て其身を蔽ふ所の有り其  
骨ハ軟くして色白く魚ハ  
皆卵を生きて一魚の卵を生  
まると其数毎に数十より多  
く一其卵を魚子と云ふ或  
は海中或は河中或は泥中



いりくよく魚となる魚類を声あきとよめなり

第七十三課 人の食となる魚類の論

海魚河魚ともに食用となりて海魚にて人の多く食するものハ鯛方頭魚鰓鱈鯖鮭松魚華鰯魚鰯魚等あり河魚ハイサヒ鯉鯽鱒鱖香魚等なり魚類の中ハホウケ(雀)ハ至つて食と食するものありと批頭魚鰓沙魚など其うちハて甚しきものなり

第十篇 蟲類 蠅類の論

第七十四課 蠅の論

蠅を六足有り只蜘蛛と蠍とハ八足なり蠅の身ハ頭胸腹の三段に分つ尾ヲ針と持つもの有り蜂蜜蜂木蜂の類是なり蠅の平生ハ何るものも蟬蝶燈蛾甲虫蟻蜂蜜蜂蠹魚螢蚊等なり

第七十五課 蠅の取らんと變へる論

蠅其形ちと数度變るものなり殊ニ三次おるもの多しと初めハ小卵の中より其卵変トく一ツの蠅となり既ニ大なる水バ身漸く縮まり硬く變トく蛹となり其後蛹裂テ翼あり蟲と成リ卵と生トて死するなり

第七十六課 蟲の用ある論

蟲の用あると甚ど多し蜂ハよく蜜と釀し蠟と  
結ひ蠶ハよく絲を吐き呀爛虫ハ呀爛米とつめ  
画の具を結び画工漆工の用をあたふ五倍子亦  
蟲の結ふものよして墨水と作と皂色と漆と紫  
銅蟲を脂と結ひて膠の如く封蠟と作るべし

第七十七課 刺類貝類の論

此類の物を皆其身質柔軟にして或ハ肉にて敷  
筒の環と為し相比合せて身となり或ハ外に貝  
殼と具へて骨の代とも刺と蛭とハ肉の環と合

せて身となり蝸牛と牡蠣とハ外に殼と具ふ  
ものなり此軟質の生物ホも陸に居ると水に居  
るとの別有り蝸牛等の如きを陸に居り牡蠣類  
の如きを水に住むなり

第七十八課 刺類貝類の用ある論

蚯蚓ハ上地を穿ち行きて土と鬆し又魚と釣  
の餌ともなり水蛭ハ醫者の用に入りてよく血  
と吸ひ墨魚ハ黒き汁を生し其汁を用ひて墨粉  
と作るべし蠣殼ハ真珠と生し石決明にてハ  
代作り又青貝細工の用ふべし

啓蒙知恵の環巻の二  
植物論  
植物の類  
植物とハ真木、灌木、草、菜、鳳尾  
草、耳葦の類、ナ、葦類、ハ地面  
及び朽木の上、小生、耳類、ハ  
樹と石の上、生、ト、苔の類、ハ  
林の中、と古き壁、生、ト、草の

啓蒙知恵の環巻の二

第十一篇

植物論

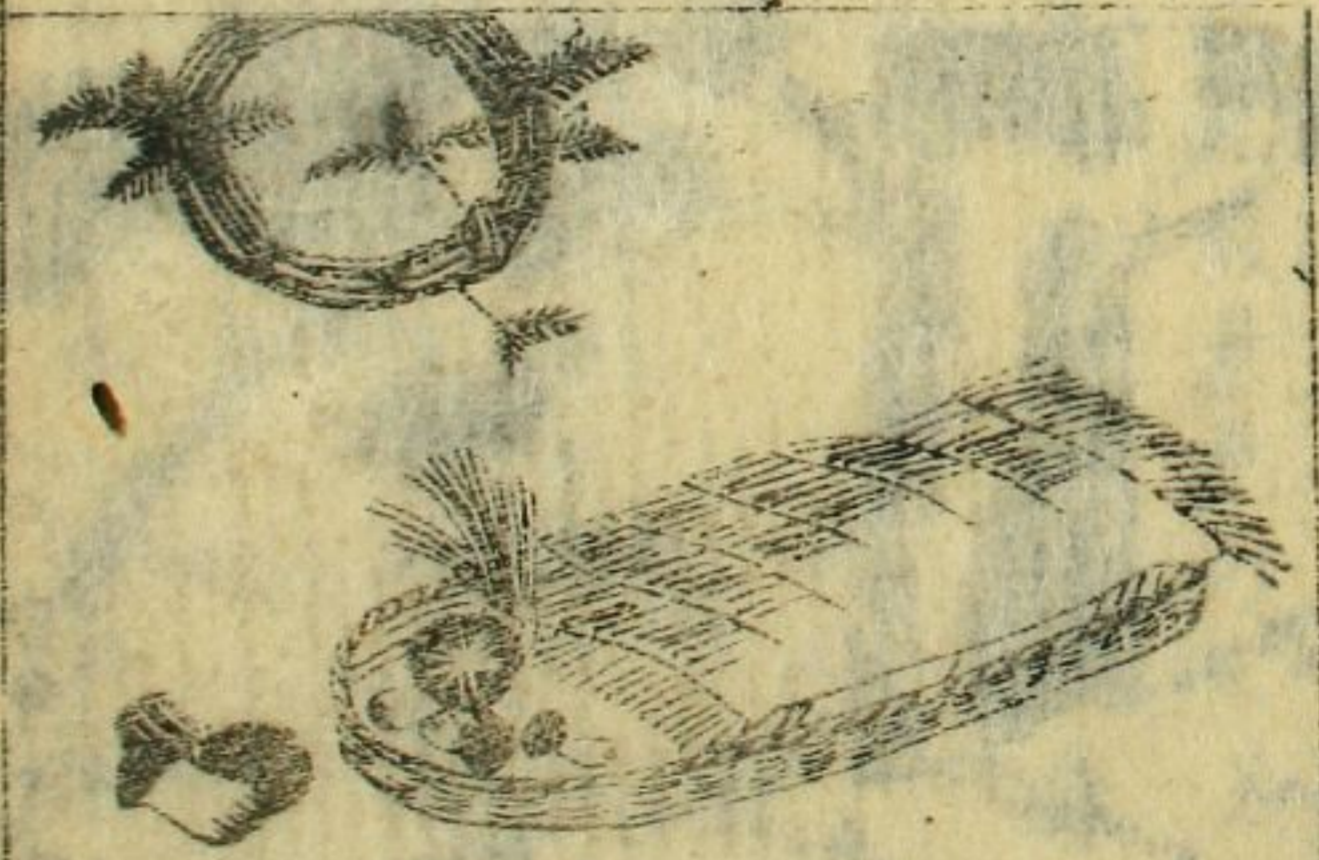
第七十九課

植物の類

と分つ論

植物とハ真木、灌木、草、菜、鳳尾  
草、耳葦の類、ナ、葦類、ハ地面  
及び朽木の上、小生、耳類、ハ  
樹と石の上、生、ト、苔の類、ハ  
林の中、と古き壁、生、ト、草の

菟子トウジと譯述

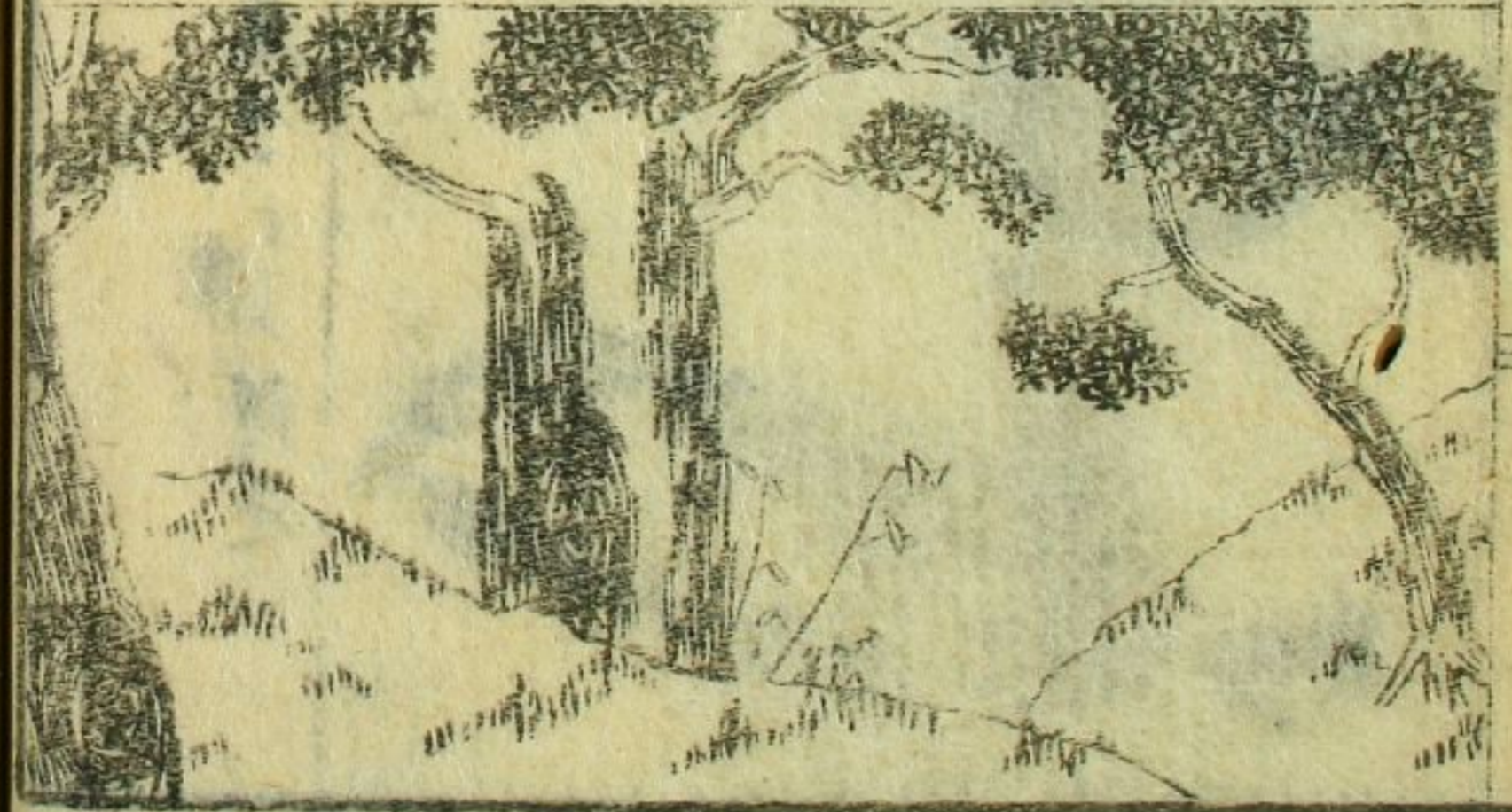


類ハ田野ノ生ト鳳尾類ハ多  
 く日陰の處ニ生ト菜と花と  
 ハ園畑ニ生ト真木灌木ハ林  
 ニ生ト又求めて栽つくるト  
 何り

第八十課

真木灌木の論

真木も灌木も幹枝根と土小  
 くな同ト木質なり然るに  
 其類を分つそのを真木ハ其



枝を幹より發し灌木を矮くして叢生し枝ハ根  
 より發する故なり園畑ニ生する木何り山林ニ  
 生する木何り求めて家屋の點綴景色のたゞ  
 栽附するもの何り或るもの葉と摘取る為ニ栽附  
 する者何り材木の用ニ植附するもの何り

第八十一課

材木の論

材木の用立處其廉甚多一松杉等の樹ハ房屋  
 と構へ櫺の樹を船と造り楡の樹ハ用ひて汲水  
 筒水車等の器と作り榛の木ハ匠器の柄トなる  
 べく山毛櫨木椴と作るべく胡桃の樹ハ小銃

の臺に宜しく菩提樹を雕工り宜しく字を雕り  
畫と刻まざるも櫻梨棗を宜しくとせ

第八十二課 穀と結ぶ草の論

草類のくは用あるものも穀と結ぶの類は如く  
ハナシ或ハ粒のまき食し或ハ磨粉となし食  
ハ俱に生と養ふべし其禾ハ高く地上に生  
ま其中畑に生むるもの何り水田に生むるもの  
何り世界中之と生むる所少なうを五穀ハ其  
穂の中は何る時ハ糠何りて被包たり

第八十三課 野菜の論

園圃小く多く野菜と産まみなぐの食に用ふべ  
し其の最も平常のものハ芋類諸薯菜蘿蔔紅羅  
蔔蕪菁甜菜葱花菜莧菜龍鬚菜等なり其生の  
列物ハ陪なものハ苺菜芥苳苳早芥等用ひて亦  
ひと調ふものハ薄荷茴片紫蘇藜蒿等なり園圃  
の中ハ豆と瓜の類も種々なり

第八十四課 薬に入る植物の論

薬に入るべき植物甚多し其根を取る者ハ大  
黄甘草等のごとく其花を取るものハ甘菊玫瑰  
などの如く其皮を取るものハ幾那肉桂等の如

く其汁と取るものハ阿芙蓉などの如く一俵又其  
葉と取るものハ枇杷紫蘇の如く其仁とすも  
のち桃杏の如く其核と取るものハ栗桂枝等の  
おと諸藥品と名薬と採るく何て先まき依  
採りて製法して然る後薬肆に售るなり

第八十五課 植花の論

園中植附花ハ梅櫻薔薇花夜合花向日葵菊  
茶山花杜鵑海棠夾竹桃茉莉指甲牡丹芍薬の類  
其他種類甚ど若し縷述べうべし一年つと  
て枯る、そのと草本といひ歷年常又茂るもの

と木本と

第八十六課

鳳尾草草類の論

鳳尾の類も食ふべきものあり  
蕨蕨是なり又苦と作り牛  
馬の小坐と鋪くべきものあり  
苔と茸の類ハ石の上古壁  
樹木土面にも苔と樂とす  
るべきものあり耳と漆と  
なるべきものあり又食ふ



き者も有り草類ハ推草松草など其類ノ中  
食ふべきもの有り又毒ノ一々食らふべきもの  
も有り

第八十七課 植物ノ用ノ論

前ノ言ハ所ノ穀類野菜ノ外更ニ食物ノ多ク  
植物ノ出づ茶加非各般ノ香料其外糖藕粉西  
國米葛粉是なり又南海ノ島々ニ蒸餅菓木  
ノもの有り其木ハ屋ト作るニ其皮ハ布ト織  
るニ其葉ハ人ノ糧トなるニ其木ニ中ニ木  
云々

第八十八課 其二

椰子其肉内ニ水有り清涼ノ味ヨリ其殼  
ハ杯楮ト云まべく其衣ハ蓆トナリ繩トナリ蓆  
ト云まべく其肉ヲ食ふべく其油ハ搾ルニ椰樹  
生長ノ地ハ富者ノ大厦モ貧人ノ小廬モ皆椰  
木ヲ用ひて造る其葉ハ編織テ屋根ノ葺料ト  
なまぐ

第八十九課 植物ノ具なる處ノ論

草木ノ根幹等ノ處彼ト此ト同トありさる有り  
其根ノ長ハ一々尖るもの有り密トて鬚ノ如



其幹或ハ實一たり何ハ  
 其葉ニ形状  
 其花の形色香ニ各々同トからまし其子ニ或  
 ハ肉内ニ藏ス或ハ殼ニ覆ル或ハ葉ニ夾むもの  
 何リ或ハ棟ニ包むもの何リ

第九十課 植物の生長論

草木の生長ハ汁氣の養ふより致す所なり其根  
 の最小なるものを草木の石と云ふ土中に入り

汁氣で吸ひ其汁と幹に送り  
 枝葉に分ちて一身の中ニ微  
 一ヒその養ひを得たる處を  
 何リハ草木を栽すにハ  
 或ハその種を播き或ハ其根  
 を分ち或ハ其枝條を折て栽  
 挿と云ふなり

第十二篇 地の論

第九十一課

地面形を分つ論



地の形ハ乃ち圓一故に之を地球と名づく其全  
面を土と水と成り平地山嶽谷島等ハなる土  
の部あり洋海河湖ハなる水の分なく地上は許  
多の邦國有り其國々ハ市街村田畑園庭金鑽石  
礦路林澤郊野等あり

第九十二課 上の形と分つ論

地の平々にして高う少く四方八面廣潤一たる  
處を平地といひ平地の上よりて突然高く竦  
えたるものを山嶽といひ山の頂は火を發し  
ものを火山といひ西山の開地卑くして空洞

るものを谷といひ陸上にして周圍に水あり  
のを島とつし山よりる洞穴と巖窟といひ地  
のよりのを土窟といふ

第九十三課 水滙の論

水の火は滙て以て地球の大洲と分ち隔つる  
のを洋といひ海といふ水の分ち流きて洋と海  
に注ぐものを河といふ水を中央にして週り上  
を繞るものを湖といふ地下に水有り其湧出  
の處を泉といふ泉の處に於て人毎に井を掘  
たり平地にして低く濕りる處を澤といふ

第九十四課

水の変り論

水凝れ氷となる地球の南北兩極海に於てハ  
 その氷高く突上りて常に山の如く日の熱にて  
 水と蒸る水變りて水蒸氣となり水蒸氣外に雲  
 を成し雲結んで雨となす水と煮て熱極れば變  
 じて蒸氣となるあり海の水は鹹し人飲まざり  
 たらず飲べき水は色なく臭なく味なきを宜  
 し

第九十五課

地の質の論

地の質ハ七類塩類、金屬礦、屬と以て成るなり上

類一なり以沙、河、礫、河、石

灰あり粉土、河、石、方是なり

砂、海邊、多く或ハ砂、坑、

河、礫、坑、河、塩、坑、

海、取、り、又、塩、坑、

取、金、銀、銅、鐵、鉛、錫、及、び、石、炭、

硫、黄、等、な、地、の、財、質、を、為、す、

そのにて各地の内より掘出

をあり

第九十六課

地質の論



百燧石

用ひて玻璃を作り紅埴ハ用ひて煉化  
石と瓦を作り白土、碗、碟、其外諸般の磁器を作  
り大理石、烟筒の額を作り、朽石とワシ、そのハ  
金額を磨くに用ひ石灰石ハ、画工ハ用ひ硝石ハ火薬を  
造る

第九十七課 金属の論

金の平常用るる金類、金銀銅、錫、鉛、亜鉛、及  
水銀なり、金銀ハ柄、寶金ト云、鉄を生ずる

銅、鐵、錫、鉛、亜鉛ハ産むるに多し、用  
る處も亦多し、鉄ハ剛く鉛ハ柔し、汞ハ乃ち流動  
し、金銀ト銅トハ、いな鑄て錢となり、以て商法の  
便利と云ふなり

第九十八課 燃ゆべき礦属の論

金属の外、更ニ火の燃つく礦属、乃ち亦礦山  
り堀取るなり、硫黄、石炭の如し、硫黄ハ色黄なり  
焼くさハその烟、人をして嚏しむ、石炭ハ色黒  
し、燃ゆ薪、充べし、其類、穀、糠、石性、石炭、木  
性、石炭、山石炭、光石炭等、是なり、又石より出る油

あり 瀝青の類 石腦油の如き是なり

第九十九課 金類の用をなす論

鐵ハ各般の器を作るべし或ハ重大なる器に用  
ひ或ハ双物の用ニ使ふ錫を以て薄き鐵片ニ鋪  
き蓋ハ即ち白きブレッキとなす之を以て又  
箱燭臺等を作るべし金銀ハ錢を鑄又飾となす  
一 鉛ハ長き水筒及び水溜を作り又屋背の水  
槽を作るべし銅と並鉛とを合まれば即ち真鍮  
を作るべし

第一百課 寶石の論

石の貴くして幾つありきものを玉とす其類甚  
多し碧玉青玉蒼玉綠玉紫玉葱疇瑪瑙猫兒眼  
翡翠玉等あり金鋼石ハ色なく透明りて寶石の  
至て貴きものなり

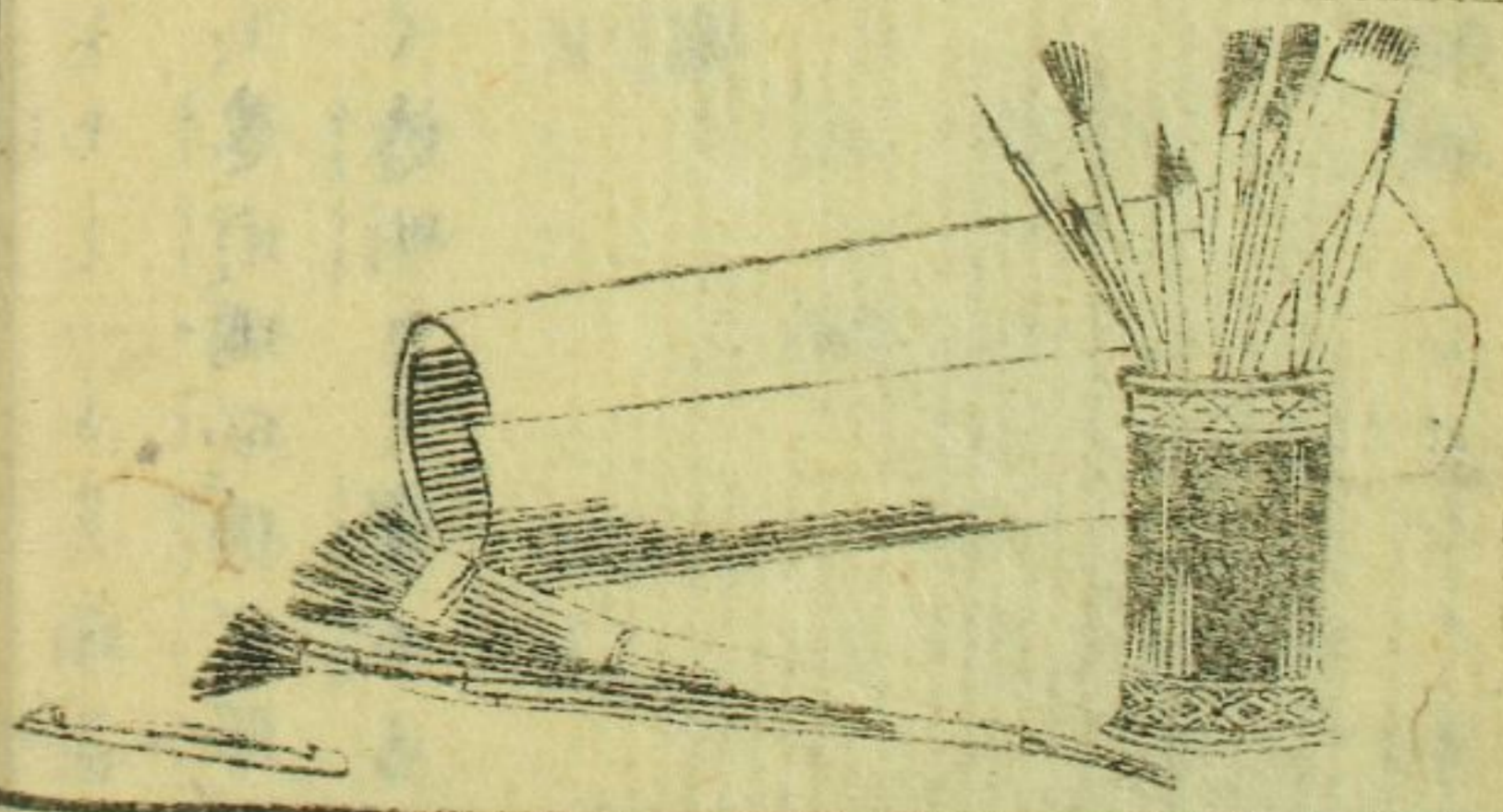
第十三篇 物の體質の論

第一百課 諸物三類を分つ論

世間日用の物其由て來る所を動物植物礦属の  
三類なり天下一品も此三類の中より出でる物  
一々一假令ハ此筆よて言えんよその先ハ毛を  
以て作らなばその質乃ち動物のるゆなり其

柄ハ木々々々ハ竹なまを其  
 質ハ乃ち植物の類より出づ  
 此紙ハ木々々々ハ有棉を  
 以て造る處即ち植物の類  
 属也此小刀の柄ハ乃ち象牙  
 たり然きハ則ち其の質ハ動  
 物の類より出て其双ハ鋼な  
 きを即ち鑛属の類ニ属する  
 べしと

第百二課



輸入品の動物質ニ属するもの  
 此論

物の外邦より舶来し本處に至るものを輸入  
 品とす本邦を以て言ハ輸入品の動物質ニ  
 属するもの甚多一羅縵羅縵玳瑁珊瑚犀角  
 象牙草蠟燭海馬才鯨皮牛酪其外毛織の類なり  
 第百三課 輸入品植物に属するもの論  
 輸入品の植物ニ属するもの亦大なり藤砂  
 糖加非落花牛木棉莫大小類紙類米麥諸藥品  
 草木紫檀蕪木更紗金巾唐棧書籍酒類等なり

第一百四課

輸入品に樹脂の何の論

樹木の脂を輸入するものも亦多し亞刺伯脂ハ  
一種の銷塞花樹より出て乳香沒藥及び沈香ハ  
藥に入らざり抹紙膠及び新洲樹膠ハ水濕を防  
ぐへ其他の用亦多し

第一百五課

論

輸入品に植物の根と油の何の

草木の根及び其産出の宜しきものハ其用あり  
以て又舶來するなり 參大黃當歸龍胆等の  
根を用いて藥となし 坭菴根ハ香とて草木の油

を出せり亦ハ 檳榔ハ檳榔油を出し 草麻子

ハ草麻油を出し 丁子ハ丁子油を出さ

第一百六課

礦産の論

諸礦の中多く物に製して其原の質と同トあり  
さるやうにならざるものハ 譬ハ銅鐵鉛亜鉛等の  
如きものも本ハな礦中より出て其礦を視  
るに石に似たる物の多尋常日用の器多く 鐵鑛  
より出萬民必も需むる所の錢も 金銀銅鑛より  
出米る處なり

第一百七課

人の花費する所の物の論

又蒙恩の環 卷之二

人の毎小むらり葉も品ものに又用は立つべき  
木の切り木の削屑鋸屑紙の裁屑のきも貨物  
を詰めて荷作らるる墊襪旁塞は用ふべく舊  
毛氈襦袢も拵碎て再び粗布を織るべく棉布廢  
布の破爛たるものも搗て漿となし紙を造るべく  
く玻璃の碎ハ玻璃匠に歸し再び熔して又硝子  
を作らるる

第百八課 賤値かるとの論

賤値かるとの論も用をなさし常の品土  
て紐子を造れハ之を視るとに寶石の如く織屑の

葉了羊の毛碎みて林襪を作らるる縫工の裁屑  
ハ樹の枝を束ねて牆にくくおく秋の大の落  
葉ハ掃集めて貧乏の林襪となまらるる

第百九課 物として用何とせざるをなき論

物として用あふざるハな故に物として一も  
棄べきものあり獸骨の大なる者ハ刀又の柄と  
なまべく小なるものハ搗碎きて粉と糞料と  
あす登く樹の枯枝ハ甚と薪となまらるる  
橡の子ハ用ひて豚を養はるる獸の皮角蹄の  
骨も亦膠を製まらるる

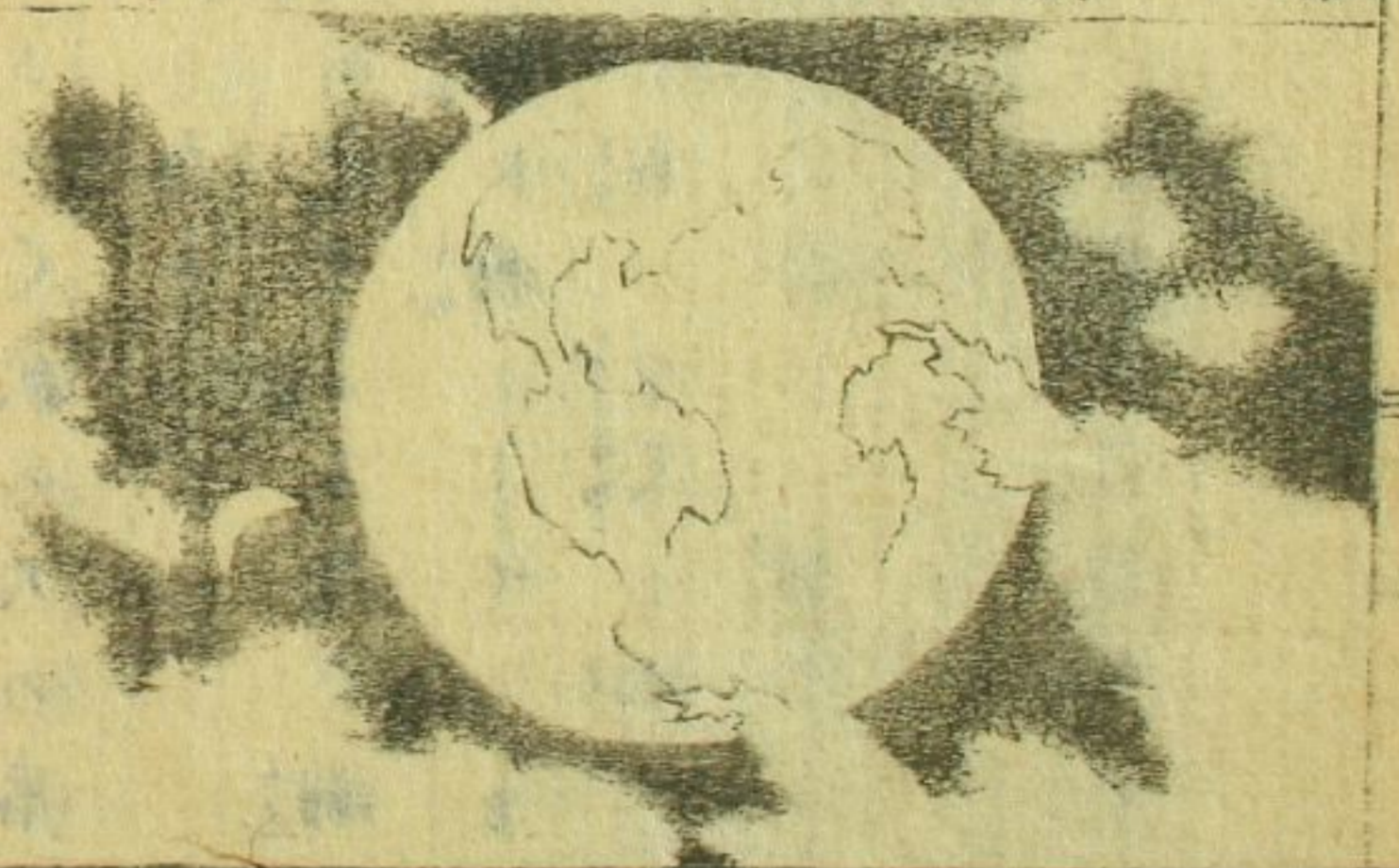


第十四篇 空氣諸天の論

第一百課

宇宙及び地球の論

昔の人ハ地を扁平なるもの  
と思つり去なぐ其實ハ大  
圓き珠にて土と水とを  
以て成る者なり又日ハ地を  
西て東より西に至ると思  
其實ハ一りも乃ち地球  
を繞て行毎年一週を



るなりけれ遠く天日見ゆる星も多くと大陽た  
ると疑ひなり大陽ハ日のこゝなり又各々  
は偶々行星ありて之を環繞て息まざるあり  
地球水星金星等の吾ハ日を繞る如しと言ふ

第一百一課 極の論

今我一の橙を巨指と食指にて把り以て之を地  
球とせしむ六食指を上にありて北極と巨  
指を南極とせしむ橙の蒂底とて北極と好  
世の眞形に似たり蓋し地を圓き球とるなり  
二極の異ハ微しく平らなり

を名づけて地軸の端とつふ

第百十二課

地の運動論

地球ハ軸を機として自ら旋る  
こと毎日一度又別は週年は  
日を匝るごとく一度なりその  
みづらうも軸轉もるは由て半  
球は一面は日換りて日は向  
ふ日は向ふ處ハ光を承て明  
ふ日は背く處ハ光なく



て暗し明なる時を晝と暗き時を夜とを其日  
を匝る由て其位置時々に變り兩極更々代り  
く日小向ふ此は由て四季を成まなり

第百十三課 二分二至の論

春の季は一日何り秋の季は一日何り天下の  
晝夜平分小して各々十二時なり此二日を春分  
秋分とつふ夏の季は一日何り晝週年の日より  
長し冬の季は一日何り晝週年の日より短し此  
二日を夏至冬至とつふ

第百十四課 月の論

天文口録の巻

卷之二

四

月ハ地球ヲ隨テ相與ニ日ヲ繞リ又クづラシ地  
 を繞テ行ナリ穹蒼の中月の兼麗ハ如クこのな  
 く年中多くハ夜小何もそそその光ハ沽也月  
 の形ハ常ニ變ズ其地ヲ繞ラズ大約二十九日小  
 一週まゝなり年を以テ月に分フハ之ヲ為  
 なり

第百十五課 空氣の論

地球ハ氣の内ニ包まれ人の身ハ氣ニ觸れ又之  
 を呼吸ス氣の速ニ動を風といひ風の旋轉テ吹  
 らス旋風といふ霧ハ地より騰りて雲をなシ雲

氣の凝結リテ地ニ降るを雨  
 とす

第百十六課

氣中の景象論

氣中ハ明物有り或ハ浮あふひ  
 或ハ流ながし候ち見ハ忽ち消きゆ  
 毛の之を景象とす雨あめふる  
 時日々の對天ニ有りて雨點  
 一照あり輝きらきを虹にじとす月つきの  
 照あり月虹つきにじとす

文章の意の界



雲氣日月を圍ひ抱へて環となすその状暈といふ閃電ハ其左より電氣の雲の中よりもき出たり雲もまじとおのづから景象の一なり

第十五篇 時節の論

第百十七課 日を分つ論

毎日此晝夜ハ二十四時にして夜半より正午に至る十二時これを午前幾時と數へ正午より中夜に至る又十二時これを午後幾時と數ふ一日の間ハ早朝上午正午下午晩夜中夜の數候あり日の出るを晝とふ一日の入るを夜とす日の

出んとするを黎明といひ日の入り際を黄昏といふ

第百十八課 月と季との論

十二月を一年とし昔の太陰曆よてハ十九年の内に七の閏月あれども今の太陽曆ハ四年の内は只一日の閏ありのみ又月に大小の別あり大ハ三十一日小ハ三十日あり月と閏との歌あり其歌よ言ふ

一三五七八十や十二月日數三十一日と知れ

二月の廿八日、四六九十一月の廿日、数二十  
閏年の四年は一度、其のまゝ、八月の二日の末に  
一日を増す

毎月各々名號有りて之を別つ一年を春夏秋冬  
の四季に分ち一季各三月づゝ、小く三四五月を  
春と一六七八月を夏と一九十十一月を秋と一  
十二月を冬とを云ふあり

第百十九課 月と旬との論

十日を一句と一月上中下の三旬有り又七日  
毎を週と云ふ之を日曜月曜火曜水曜木曜金

曜土曜日と名づく

第百二十課 甲子と百年との論

吾世歴ハ古来甲子を用ひて年を記一六十年を  
一同とせしが明治六年より

神武天皇の元年辛酉を紀元とし百年を以て年  
を数ふ即今年明治七年ハ紀元二千五百三十四  
年ハなるなり 西洋ハ其教主の生れ出る年を第  
一年とし今年ハ至り千八百七十四年あり

第十六篇 地球寒暑道を令つ等の論

第百二十一課 四方の論

くも正午の時におもて日  
不向つて立つ時ハ前ハ南不  
背ハ北不左ハ東右ハ西なり  
も地球の圖面は對して之  
を見ハ上ハ北下ハ南左  
ハ西右ハ東あり東西南北  
みだを四方と謂なり

第百二十二課

赤道及び五帯の論

南北一極の真中地球の最も



大なる處より地球圖に線を引く環繞  
のを名づけて赤道と云ふ又圖面を五帯に分ち  
てを熱帯と云ふ赤道の両にさなり二三を温  
帯と云ひ又正帯と云ふ四五を寒帯と云ふ南  
極北極の處なり熱帯寒帯の間ハ即ち兩温帯の  
所なり

第百二十三課

製帯の論

地球機の中央を濶き帯一條を以て東より西  
より包りて其面積三分の一を蓋ふやうな  
ときハ恰も之を熱帯と云ふ擬一得べきなり其の

熱帯の動物の至つて大ひなるもの至つて麗  
しきもの又至つて兇きもの等多し一熱帯の  
地人の用を多し動物固より多し一  
又猛獸惡鳥毒蛇螫蟲等の淵藪なり

第百二十四課 寒帯の論

寒帯 南極北極の處より温帯の界に至りて  
止り其廣極より赤道に至る迄の大約四分の  
一なり 白熊馴鹿大鯨魚海馬海豹等多く  
一處に寒帯の間ハ一年のうち日輪數月見へ  
又數月没らり

第百二十五課 二温帯の論

二温帯を熱帯と兩寒帯との間より地球中  
よく第一の爽快なる處より一此帯中の動物を  
人の用をなすもの別帯不比ぶ尤も多し獸  
類を馬牛羊鹿等禽類を鷲鴟鷄等あり又魚類亦  
と多く嘉きものあり

第百二十六課 諸帯の土人の論

熱帯に生くる人ハ皮膚多くハ全く黒く或ハ淺  
黒くして性質懶惰なり 二温帯に居るものハ皮  
膚全く白く或は稍白く其性靈慧してよく事を

勤む寒帯は生る 此のハ形  
軀稜く見識瑣細して鱗魚を  
以て生業とす

第百二十七課

寒暑道を分つ論

一帯の中よても赤道不近き  
程熱氣次第は強く漸く遠け  
るを熱漸く減るるのなり  
西洋の學者地球の面を若干  
の寒暑道を分つる益熱氣の



多少を視くを別ちたり 赤道の左右を熱氣  
猛烈にして草木盛んに茂り氷雪を見らばやな  
く南北二極の處におめてハ氷雪年中降りて草  
木生ぜし絶てく物の跡なきハ

第百二十八課

寒暑道の土産論

寒暑道の第一は熱氣一番烈き處よりハ  
を土産に薑薑葱胡椒などの類なり又涼なる菓  
實を生じ椰子蒸餅菓木等の如き是なり 第二道  
は車小香料を出し肉桂没藥乳香等の如き是な  
り亦羨き菓實ハ鳳梨棗子酸果等の如き是を





小ハ亦一よく生むるや、何れ尤も其脆く柔らかなるもの、亦ても巧い法を用ひて培養せしむるを植むるものなり

第百三十二課 其五

草木のうち、少数道に生むるもの、少くならず、熱地、小産むるもの、夏の時分、寒地、小生じむものあり、今諸方の草木をまじへ、聚めて我日本の園圃の中、裁附してよく其生植つを見ても、地球上何處の産物よても、その本地の熱寒小く、いらず、假初小むるの草木の性、順つて培養せむる

時を地を換るや、いづれも生せざるものと、なれを知らず、なきなり

第十七篇 人間交際の論

第百三十三課 家族の論

同ト父母より生きたる兒女ハ、一の家族なり、其一家族の兄弟姉妹より生れたる兒女を合せ稱して親族といふ、親族の最も親しき者、父母兄弟姉妹なり、其次ハ祖父祖母伯叔父母堂表兄弟姉妹なり

第百三十四課 尚賣および耕作の論

工人諸商賈等ハ市街小住居  
 中少色工人ハ心と諸機械  
 を以て絹麻水綿の諸織物利  
 器鋸器其外日用の什器を作  
 り農夫多その働き人と共小  
 村郷小居り田畑を耕けを業  
 とす農工商各々本業を守り  
 て互よよく相資け合ふなり



第百三十五課 商工等の業の論  
 雜貨布帛諸器具等を賣る者を店商人といひ

子師縫工鞋工等を手職人トツひ時斗師殿治屋  
 指物屋杯を細工人とツひらう人の處に至  
 りその業をなして工錢を獲るものを傭人とい  
 ふ童子より師匠小従ひ年期を限り約束し其  
 業を習ふものを徒弟とツふ

第百三十六課 傭人の論  
 何の事をなれ小拘らず日を數へて工錢を獲  
 るものを働人トツひ家内小使ハ男女を僕婢  
 いひ富家ハ多く僕婢を召使ひその役を勤  
 む是を以て貧人傭人をその力を勞し工錢

獲るもの衆きなり

第百三十七課 學業の論

凡そ家業の中不必學ぶるや深く識ることを廣くして能くその業を習ひ熟るを要するそのつり之を學者の業といふなり道義の教師習讀の教師公事師内科醫師外科醫師等なる此業に屬す教師ハ心性の窒塞を透明し醫師ハ形骸の疑滯を通達し西洋の道義の教師を福道教師といひて教法を司るなり習讀教師ハ少年を訓解公事師ハ公事訴訟ハ關する律法の事を辯

解一内外醫師ハ人の病を療す

第百三十八課 都會家建の論

都會の地ハ宮室房屋相連りて建ち街衢有り店有り牢屋有り裁判所有り病院有り神社有り學校有り書房あり市場あり英國の都會ありハ市場を以つるに多クハ七日ごと小次あり大市を毎年數次あり各々定まる時



第百三十九課 氣燈の論

昔ハ西洋亦も多量の油を用ゑ常夜燈を燃  
市中町々の夜を照したり近ごろハ石炭の氣  
用ひて油小代にて夜も殆ど晝の如く都會城下  
何處もみなとゞゞと其氣ハ石炭  
を燒く得るころころ小く最もよく燃やまると至  
て便利なり鑿筒を地中へ埋め氣を引て各街各  
屋敷の隅々から燈を點し一ハ盜賊の患を  
防ぎ二ハ道路を行く小都台しり

第百四十課 水の論

水ハ山より出て河に流れ以て人の用を為さ  
と擧てソ小をうとず東京にてハ玉川の流を引  
て地下へ大樋を埋め府下へ分派して通く諸  
の用に給す西洋亦も亦このことありとり

第百四十一課 火の論

諸邦火を燃し食を煮るハみな同ト寒國ゆ  
ハ火小く暖りを取る本邦亦てハ多  
薪炭を用ひ國小くしてハ或ハ燐炭を用ふ澤中  
より採取するところハ西洋ハ多く石炭を用ふ石炭

石炭の類にして地中より掘取るものなり本  
 邦に石炭有りや一は日用の多き  
 小堪へて薪と木炭とハ殊小多く有りて便  
 ねバなり

第百四十二課

住居ハ必を風氣を通ま  
 論

清浄の空氣乏しき時ハ人身舒々のなり  
 故に家屋の濕多き處のや病人の卧處ハ人の  
 常小寢ふところやにおめてハ必まよく空氣を  
 通ぜしむべし又居室にて多く火を焚き燭

を燃もと化ハ空氣を焼つくもそのや急宜しく  
 風を通れし立籠りたる處小居て業を作ま  
 のを時々外に出く散歩ま

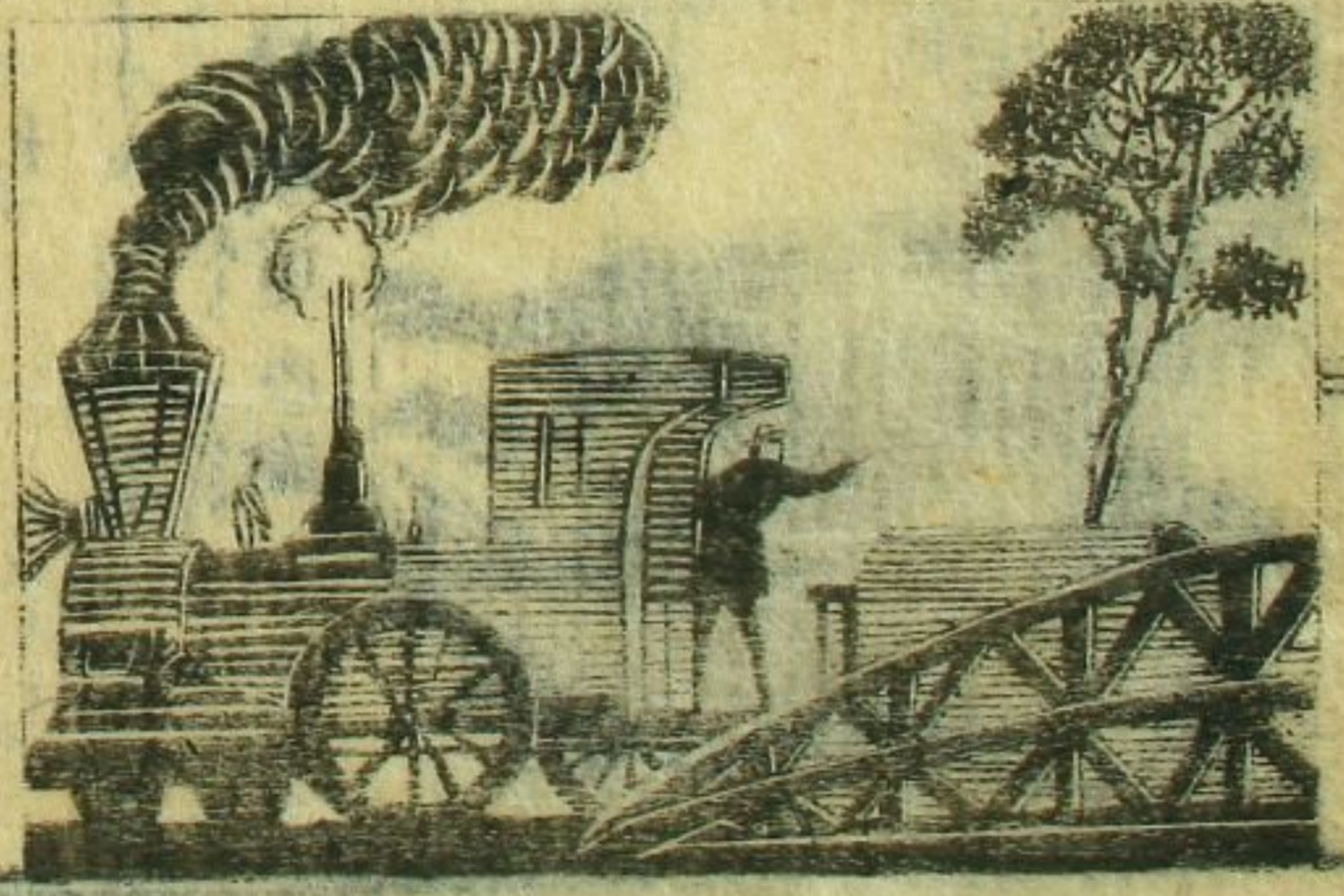
第百四十三課 道路及び鐵道の論

大抵天下の諸邦とも道路ありて諸方の土地互に相通じ  
 此等の路にぬめてくハ或ハ步行一或ハ馬小騎或ハ車  
 下座一とゆく車二輪の色  
 の四輪のとのり其さ



又此の口...  
 ...  
 ...

ハ蒸氣車じょうきしやの鐵道てつどうをゆくも  
のりなり蒸氣車じょうきしやハ數車相連かずしやあひらひ  
かりて或ハ人を載のりせ貨を載のり  
せ鐵道てつどうの上うへに行いき走いるも  
其それ速すみくなり水みづの上うへを行い  
くも船ふねを用もちふ船ふねハ或ある  
風かぜを藉たもとり或ハ蒸氣じょうきの機勢きせいを  
藉たもとりて行いくなり



啓蒙知恵の環巻の二終

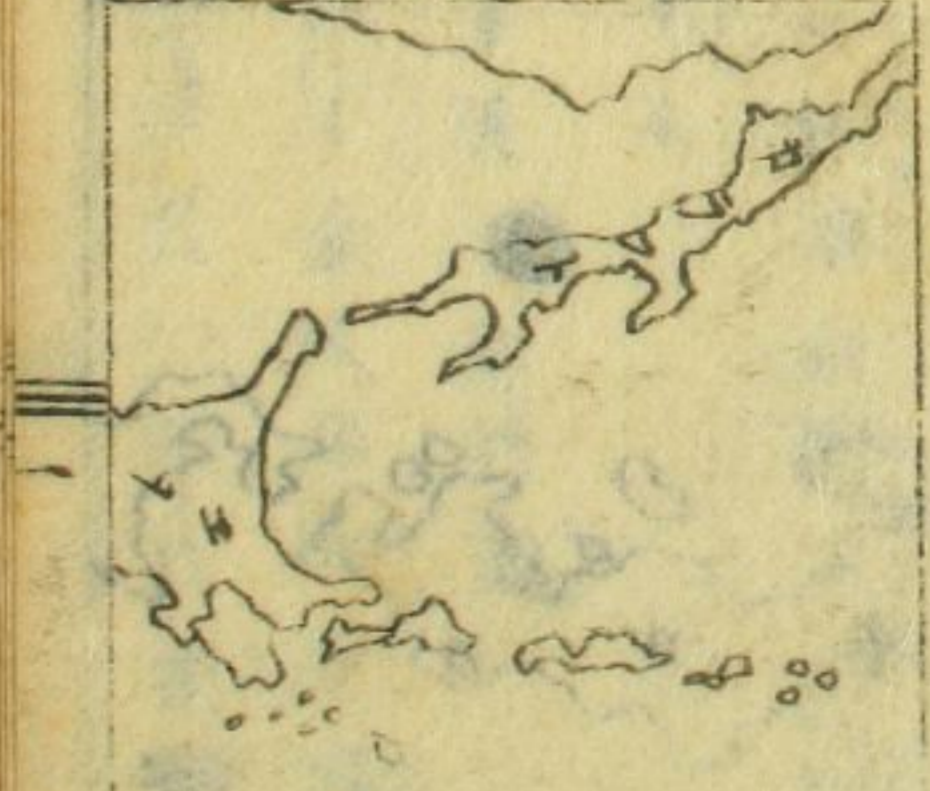
啓蒙知恵の環巻の三

坎菟子 譯述

第十八篇 國政論

第百四十四課 日本にっぽんの論ろん

皇國みくにの古いにしへハ大八洲おほやまと國くにと  
いひ豊葦原とよあしはらの水穂みづほの國くにとい  
ひ後のちハ野馬基のりまきといひ日本にっぽんの  
号なづかハそのとなく最も古いにしへく  
て太陽たいやうの生なり出いでゆせる本もと



處とつし意あり今區別し  
 八十四州とあり中不就て山  
 城州不西京をおき武藏の州  
 不東京より政一君より出て  
 萬姓をな星拱し  
 皇統ハ日の御繼神の御種  
 の承け繼ぎ玉ひく萬世易  
 らしな一官制政體不至つて  
 ハ古今沿革より今現不改革  
 新教の日々當る



第百四十五課 英國の論

英倫蘇格蘭阿爾蘭の三邦を合せて不列顛國と  
 する英國の政令法度議事上下  
 二院の定むる處小由る此二院一つハ上院又公  
 侯院と名づり一つハ下院又平民院と名づく其  
 評定する律法等も必は國王の批准を経る小の  
 らざるは國內不施行ふとや  
 第百四十六課 惡事を見その論  
 國法を犯すものハ刑罰を受べし余人の物を竊  
 る取るを偷盜とて英國にてハ其の罪を

政教の要の要

卷之三



治まらふ禁獄の科を以て一假單やて別人の筆跡名字依りて欺詐をなはしむの外邦へ流罪や謀叛人殺を犯さしむるハ死罪に處せらるる

第百四十七課 立合役吟味の論

立合役吟味の法ハ不列顛國に在る一の良法なり其法ハ裁判所ハ控へ裁判役事を裁判せらるる時民間より十二人出て其坐小列り訴訟をつまひらふ小聞札一以て辨へらるる人の罪ありと否ざるやを決断せらるる此十二人訟の辭を聴き

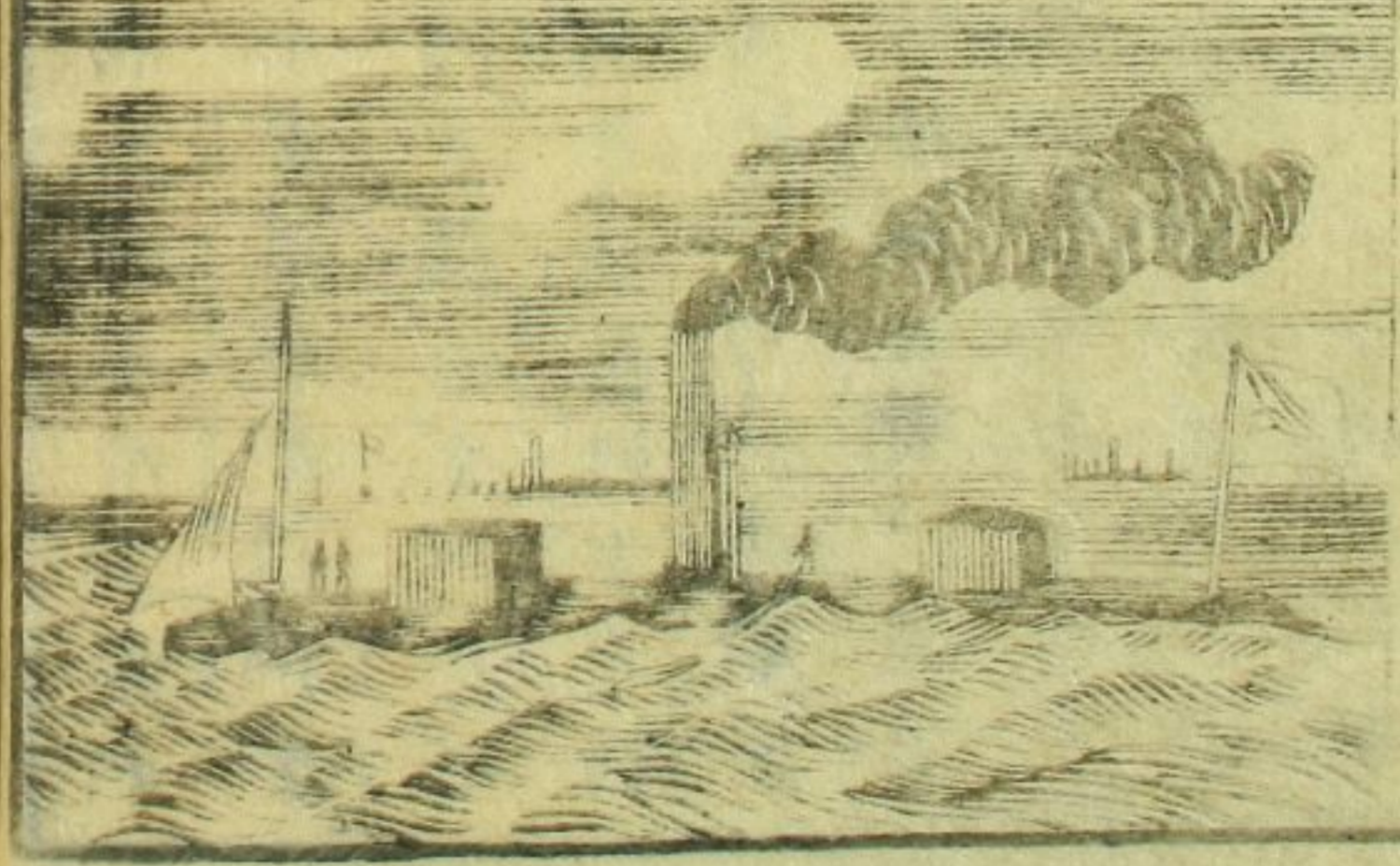
證據を辨し訴供を察し然る後々の罪の有無決定めて裁判役ハ上達せらるるに於て裁判役法を照して素を定む

第百四十八課 戦の論

凡て國の災ひハ戦より重きものハ何れト戦とを犯る人を殺し居宅伐劫の田地を變トイ荒蕪とぬき城邑村郷を多く焚燬らるる且富るものをしてゆけりかして其妻をして其夫をうりぬるめ兒女をして其父母伐喪もりの其他諸般の惡事災難多くハ戦より出來るより多し

第百四十九課 陸軍及び海軍の論

陸軍を騎兵歩兵炮兵に分ち其數甚ぶ多く  
幾大隊に分ち其數甚ぶ多く  
其の中近衛兵ハ東京に屯し  
て禁闕を衛り餘ハ八鎮臺の  
本營分營等に令れて國家の  
不虞に備へく民の安隱を守  
護も海軍ハ軍艦ヲ居り邊海  
の防を爲し兼て海内ハ周行  
して商賈の貿易を保護す海



陸軍とるに其兵老年小なり  
しもの或ハ傷を受しもの等  
ハ朝廷の恤養成うきて生涯  
を送らしもの玉ふなり



第百五十課 通用金の論

通用金を本邦のま新小金銀銅成りて鑄造玉へ  
リ二十圓十圓五圓三圓一圓の金錢有り一圓五  
十錢二十錢十錢五錢の銀錢有り一錢半錢一釐  
の銅錢あり厘ハ錢の十分一錢ハ圓の百分一  
リ故小十厘ハ一錢より一圓あり往來日

より通用せし一兩ハ即ち今の一圓ホリて一歩  
ハ今の二十五錢一朱を今の六錢三厘五毛ハ當  
るなり又金札有り夫々通用レ

第百五十一課 家産の論

房屋家財書籍畜類田地林木及び製造する處の  
諸器等ハてなみまを家産とつよこれを父母或  
ハ親ゆより傳へ受くるものあり又ハ自己の敏  
動小由と得るもの有り世ハ餘今の金を持つ人  
ハ毎小若干の財を損く國家ハ有用なる業と人  
を濟ふの善舉との助勢を爲す有りたやハバ病

院又を鐵道を起し等のことやのちや此是なり

第百五十課 租税の論

租税ハ民より納むる錢小して以て國の用ニ供  
するものなり凡家業ハ安んト保さんらや欲  
し強奪詐偽ハ遏止んことを欲し律法ハ行きん  
まやを欲し國を平ら小治まうんことを欲する  
ハ人の情なり其爲小諸官負ありて民ニ代つて  
ふまを治め以て人々小其患あうらむ其有司  
の祿ハ則ち聚むる處の租税より宛行ふなり

第十九篇 列國の論



加洲小属するもの、合衆國、加拿他、墨西哥、巴西  
等の邦なり、唯大洋洲小属する處、國と稱せざ  
して、島と名づく三大部類に分ちて東なる  
を波里尼西亞、西の西小、南の馬來西亞とい  
ひ、南小あるを澳大利ヤといふなり

第百五十五課 野劣なる國民の論

世小、甚ど野劣なる國民あり、その民全く教化なく、  
獸皮を衣服とし、野山の菓草の根を食とし、或ハ獸を獵て



其肉をやる、亞墨利加南北の二洲、澳大利ヤ、新西蘭の二島、  
ふてハ其土人、或ハ野拙なる去やかくのごとく、  
阿非利加内地の黒人も大半ハ然りと



第百五十六課 野遊する國民の論

國小都城なく、定めたる住處なく、其の民諸  
方小遊徙き、藷草を尋ねまわり、羣畜を牧し、  
或ハ饑饉を同じ隣部を侵し、戦ふものを皆野遊

の國やいふなり阿非利加。韃靼。刺伯。波斯等の  
砂漠にハ別地ハ比ぶれを多くふとあり其間に  
或ハ村落をなれものありと田を耕し産物を  
以て歐羅巴と製造たる貨物や交易を

第百五十七課

半ハ教化を被りたる國民

の論

國より其民格物致知おのり既小畧得る  
所あり教化政治子於くそて小稍々行やそ  
りといつども僅小其偏を得ていま其全き  
と得ざるものなり阿非利加の數國亞細亞の印

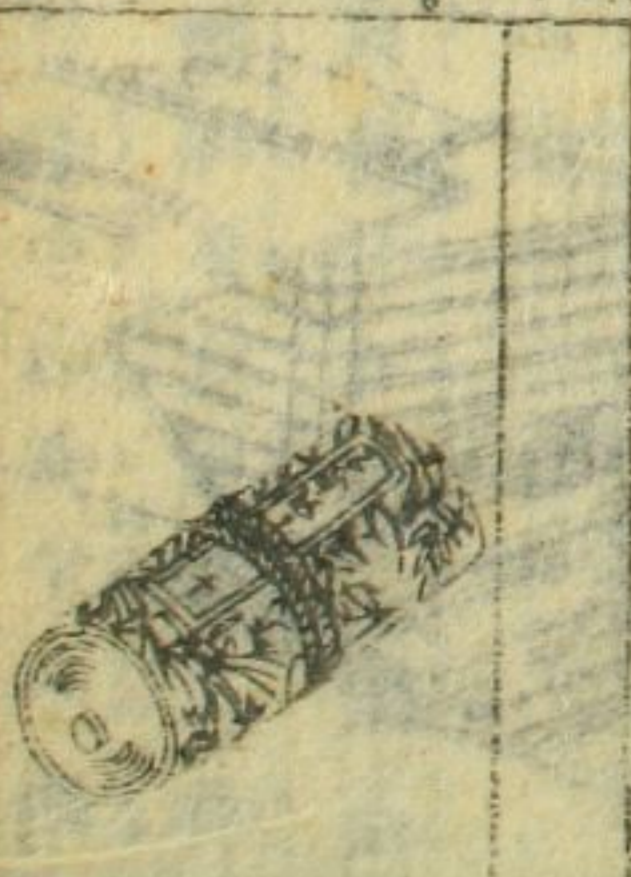
度波斯土耳其等の國のあやむるも然りかく  
のごとき國ハ其く田を耕し頗る工藝を  
識り法律あり書籍あり惟有用の藝術おのて  
いはば達せざる所あり亦風俗ハ慘酷きあやむ  
くらけ

第百五十八課

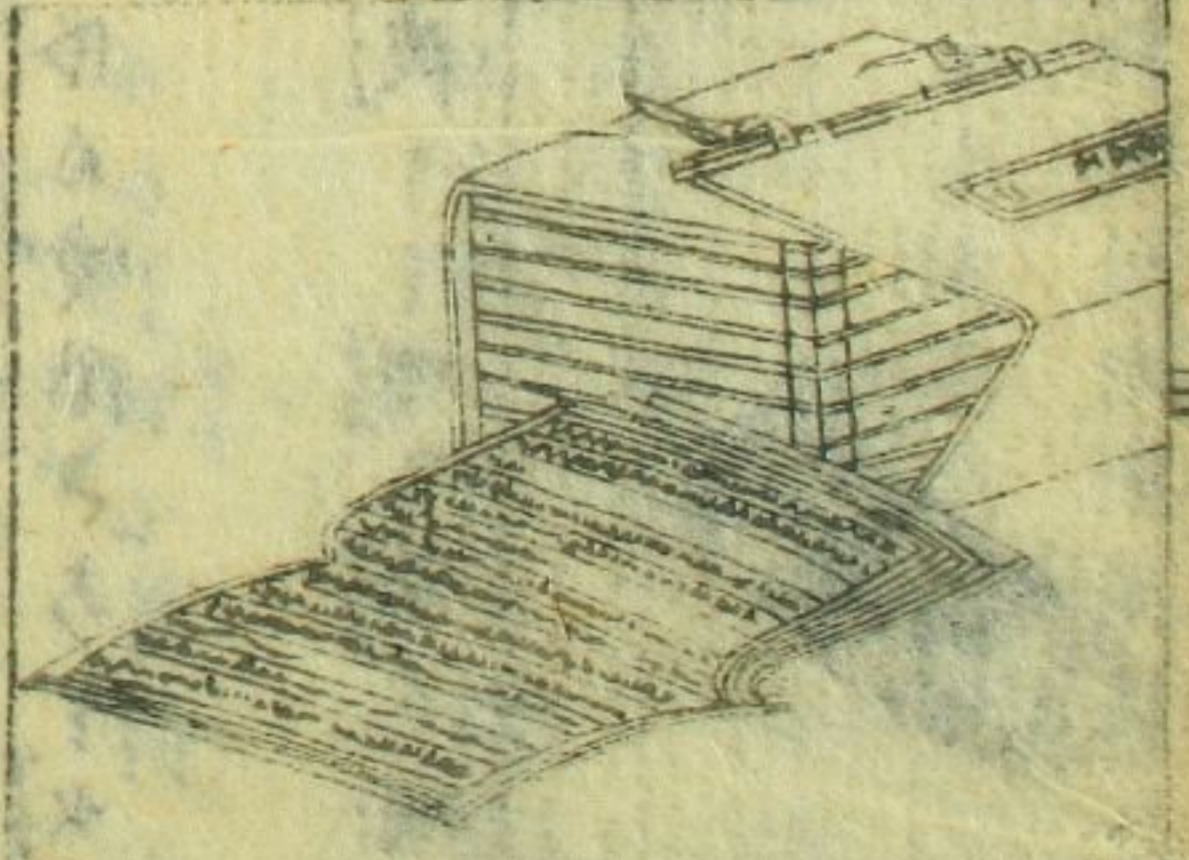
教化を被りて頗る全き國

民の論

是西班牙。葡萄牙。大里。魯西亞。  
波蘭の數國ハ教化を被りて  
頗る全きをのり稱す



其中小就て士人其技藝學問  
小熟一々民百姓ハ猶愚蒙の  
もの多しといはまきより以外  
歐羅巴の邦々及び亞墨利加  
の合衆國ハ其民天下の中の  
最も文明開化なるものやま



第二十篇 通商交易の論

第百五十九課 交易の論

諸國の産物同しりらに多く米を産するはり多

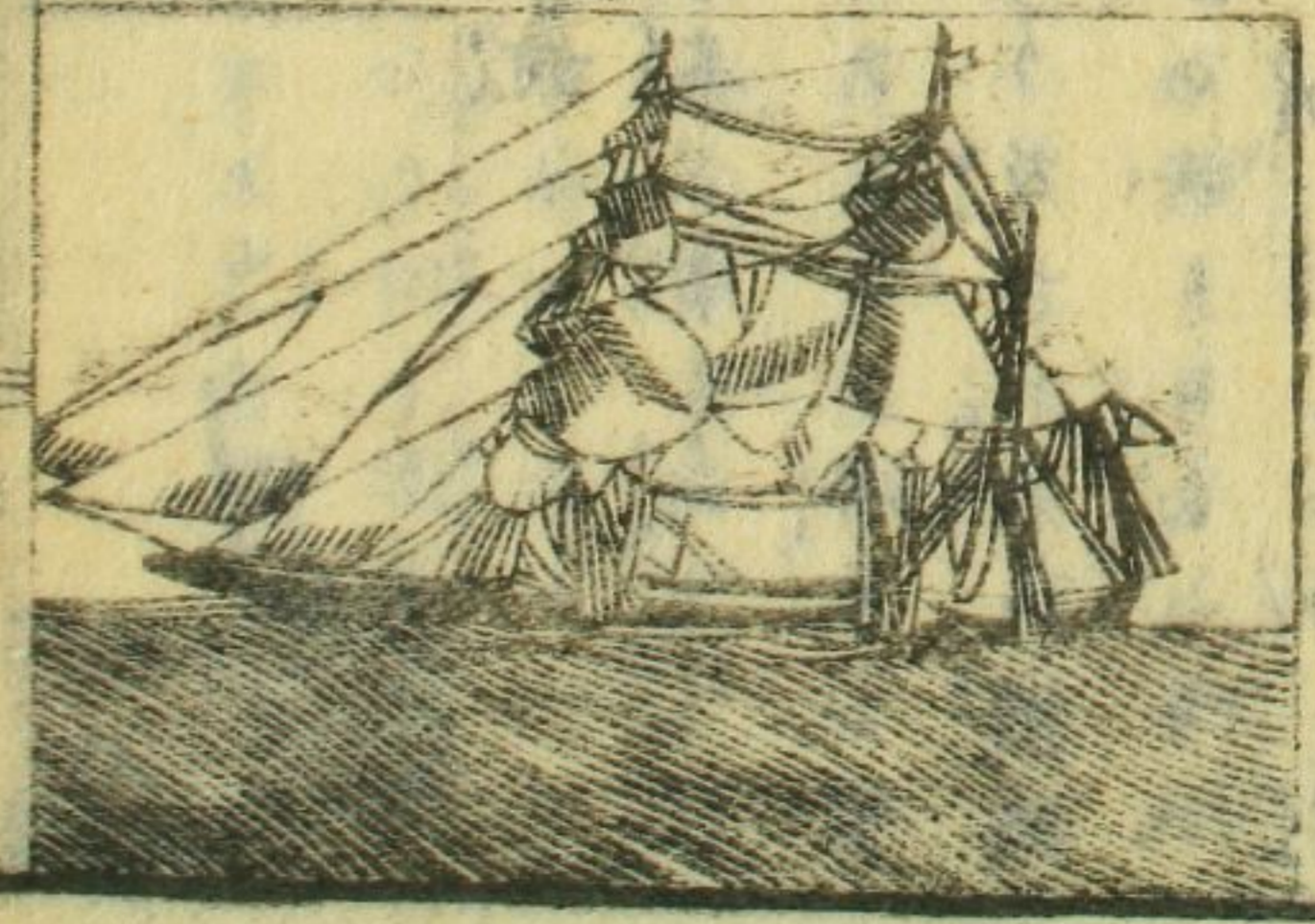
く麥を産するはり多く葡萄酒を産するはり無花  
菓橄欖果橙柑香料茶加非東漆棉花糖胡椒草樹  
膠等の物を盛小産する邦も何れ又國にありて  
ハ其の製造の品物に因て名を得るはりものも何  
り一國の産物を以て他國の物品や易あるありや  
を交易とつる

第百六十課 輸出入の論

本邦輸出の品ハ鐵銅木臘石炭蠶卵生絲真絲茶  
昆布膠菜乾海老鯧干鮫材木樟腦及び製造の物  
漆器陶器等なり輸入の貨ハ錫亞鉛炭葉水銀

藤油類 石礮 硝子類 象牙 珊瑚 龜甲 金甲 更紗 書機  
 羅紗 吳呂服 羅襪 草細工 樹脂 細工 書籍 漆粧 藥種  
 酒類 砂糖類 南京米 餅の 外穀類 及び 都下 機巧の  
 器械 日用の 器等 一々 擧て 數へ 不と 英國お  
 輸出の 品ハ 鐵 銅 磁 及び 製造の 物 輸入の 品ハ 葡  
 萄酒 茶 棉花 材木 金銀等 及び 兩國 輸出の 品ハ 葡  
 萄酒 燒酎 菓實 及び 靴 飾の 貨等 輸入の 品ハ 棉花  
 如非 香料 あり 魯國の 輸出品ハ 脂油 皮革 毛革 及  
 ひ 麻等 あり 輸入品ハ 多く 嬰帶の 産物 製造物等  
 の 支那の 輸出の 貨ハ 茶 絲等 あり 輸入の 貨

八 棉花 本綿 糸 布 足等 あり  
 第百六十三課 船の論  
 國々 相隔て 其間 小洋海の  
 水 あり 是の あり なる 船を用ひ  
 て 往來 する べき あり 其の 舟帆  
 を 揚げ 風に 藉りて 行く こと 可  
 う 又 機械を 仕裁 ぶ 蒸氣 小 因  
 て 動く こと あり 或ハ 人を  
 載せ 又ハ 荷物を 運送 せし 船を  
 高くの 所 持の こと あり 船中



文政和惠の業  
 卷之三





第百六十四課 歴史の論

歴史とは往時の事を述べ、書を其に至つて古  
 き者ハ世界を如何して創りて造るやの傳記を  
 王様の至つて肝要なるものハ天理人道の神教  
 なり我日本ハ歴史ハ天開け地闢者日月の現  
 出より載せり代々の帝王の威績偉勳古今の  
 成敗得失忠臣孝子姦邪の跡等を記し紀元以前  
 ハ鴻荒の世も多年紀ハ明らうに知れがごと  
 紀元後を世系明らうふく長く長くと  
 千五百年余なり英國の歴史ハ凡そ一千九

百年支那の歴史ハ四百餘年の世系ありといふ

第百六十五課 新聞紙及び書籍の論

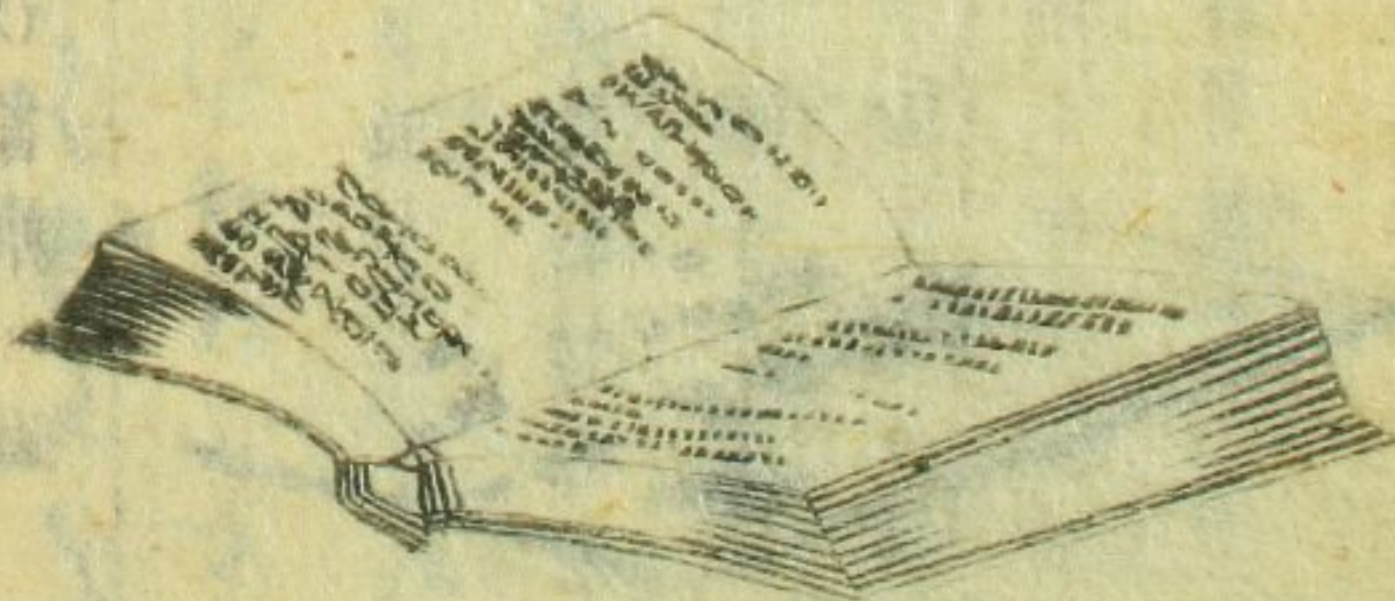
人の知識見聞を廣むるもの  
 新聞紙と書籍ハ若くハ取  
 述来新聞紙多く出来書物  
 の出版もはよく盛んか  
 教道藝術ハ益何ものも  
 小多新聞紙を災害罪咎生  
 此職業商法發明玩喜のち  
 其外一切人に益何人



を娛ましむるやハ盡く載  
 て漏まらなく實家を出  
 まし世の故坐なご知識  
 を産きそのなり書物を作  
 る一つに人を教へ一つハ  
 人の情状快ふも為の  
 のみて人よく之を讀まば必  
 ぎよく其知識を増し必  
 ぎよく其幸を大ひ小せん

第百六十六課

身を脩る論



身を脩るハ人間第一の務なり其法ハ他ならん  
 博く學び力たく行ハ耳よく聞き目よく見ふ  
 何の事業ヲ構もて眞實に心を用ひて專  
 ちに務る時ハ其の身上達せざるあやなく尊卑  
 貧富をわて於人を愛し天に順ふ心常々絶えざ  
 る時ハ其徳増益せざる事なす  
 第二十一篇 物の質及び其動き等の論  
 第百六十七課 物の質不斉性何の論  
 宇宙の間ふりるやありやるものハ歸をもとま  
 る只有形無形の二種のり形ち何るものハみな

本質有りて大抵おぼを物と云ふべし凡そ目に見ゆるもの物のみ形有る形の跡なく悉く物質を積りて成るものなり而して其物質は分ても分ても尚分つべく遂に極めて細にして目に見えざる程に至るべし此細うに至りたるもの名をけり物質の分子と云ふ若く細なる分子と迄分つべき性有り故に之を物質の分子と云ふなす花の香氣、乃ち其分子よりなる所なり

第百六十八課

物質に無盡性なる論

凡そ物の本質ハ一毫亦或之をなくするもあらず  
 一ありしぎるもの有りてよく石を碎き搗り粉と  
 となすといはれども其粉もなほ存して盡るありや  
 ない又能く水を蒸くと乾くも自らも但一時其  
 形を變り蒸氣となりて去るのみならず冷氣の過  
 ち又凝結す元の水やなる人よく炭新紙等の  
 物を焼くといへども其烟と灰とも尚残りて盡  
 るは是れを由る物質の無盡性なり

第百六十九課

物の引力の論

物質相引の力有り之を引力と云ふ之を由る物

みぬ常に結び聚る炭木石等のごやたも其  
分予此引カゆゑに凝り聚りて氷を成まなり之  
代凝集引カとツ小物の地に附ツて動きし  
おても地の引カに因る之を吸集引カとツ小地  
の口を旋つて行も亦日の吸集引カお頼るあり  
海綿ハよく其小孔を以て水を吸ふあまを毛管  
引カやツふ

第百七十課 物質各異なる論

心々物ハ重あらやまハお一尺其質におめて  
各々異なり物およりて軽きものを又甚き重きも

の何り又甚き硬きとの何り玻璃鐵の如き是な  
る又甚き軟き者ハ木紙膠鯨骨の如き是なり又  
甚き脆きものあり玻璃磁器の如き是なり又  
甚き擲て落となればきあり又線條となれば  
の何り

第百七十一課 物の動く論

物の動くものハ其居處を易ふるも中なり血  
ハ動て惣身に運り心の臓動く血代吐納し神の  
臓動く氣と呼吸し物ハ激し其動くも毛管  
激するをカやツ球ハ撃てバよく動く滾行

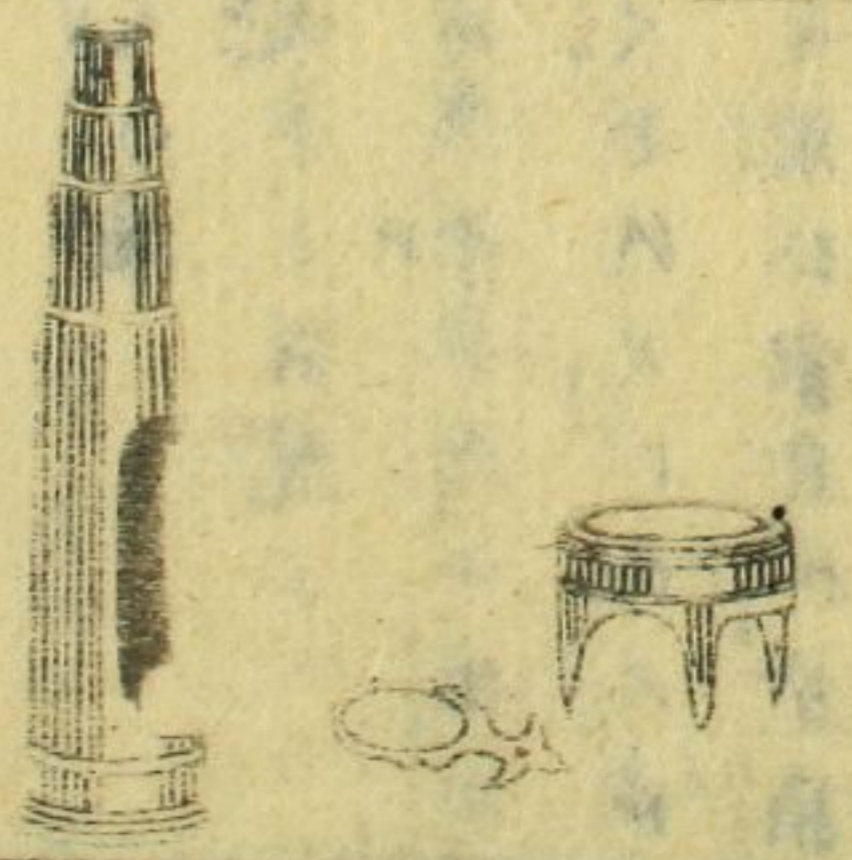
撃つハ即ち人の力也物も動くも動かさず  
ハ他の力を待てよく動くも動かさず  
ハ他の力を藉てよく動くも動かさず  
止するも物を物の情性を待つ

第百七十二課 物の形の論

物の形は取所り或ハ直く或ハ曲り或ハ正しく或  
ハ正しく或ハ丸く或ハ直く或ハ環ハ圓く或ハ曲り  
球ハ正なる或ハ真圓なり三角ハ三つの邊なり四  
角ハ四邊なり七の塊ハ七の形なり四凸  
正しく或ハ正しく

第百七十三課 物の大小の論

物の大小あり人の建  
築く物ハ至て大ひなるもの  
至一ハとも其物を築きたれ  
國に較ぶると小なり何程大  
ひなる國も之を地球に較ぶ  
れば甚しく小く地球も大なり  
や大太陽に較ぶると又小く  
大陽ハ至て大なりといハ  
宇宙に較べると至て小なり



居業夫自ハロ

又物の細小なるに至るハ顕  
微鏡をもちて見ざるや何ぞ

をぞるもの多し

第百七十四課 物の寸尺の論

凡そ物多くハ尺度を用て其大きき尺度  
尺の内尺寸あり寸の内尺寸あり今何り今の内寸厘ハ  
ト分と寸と一十寸を尺とい尺に曲尺何  
と鯨人何り布帛類ハ鯨尺を用ひ家倉机笠箱  
等の物ハ曲尺を用ひ地面を量るにハ間敷町  
敷里敷を用ひ

第百七十五課 色の論

見し所の物皆色何り天や水ハ藍色な草ハ  
緑に血も紅なり虹にも其數七色何りその中只  
紅藍黃の三色を正しき色と一餘ハ此三色  
の相雜つて成るものなす白も色に等へた  
黒も乃ち色の悉く絶えざるあり

第百七十六課 機械力の論

第百七十六課 桿の論

諸職人ハ其器ハ機械を用ひて其の働の物と  
其中ハ桿と名づくもの何り重き物ハ桿動ハ





板とくハ船内水小卸も亦と  
斜板内用ハ掘子ハよく木と  
裂くハ用ひ又石炭山石礮小  
おろて石炭或ハ石の紋縫ハ  
挿入れて開き割るに用ハ又  
之と名づさく矢と入るヤ



第百八十課 螺旋及び滑車の論  
螺旋を壓盤に多く仕懸桿と以て之を旋轉し  
上げ下さる螺旋の線條ハその全體ト高く凸起

く纏る條あり若し其條の間密ト成れハ疎きも  
のよりハ一段轉り易しハ滑車を運ぶ物と等  
ト用ハ索一條何れハ之を繞り廻り索の  
行ハ随く滑車自ら下接り同しく轉るなり

第百八十一課 機械装置の論

機器ハ如何に至妙ハ造るとハ一ともしばり  
動りしむるみや何れハ必ず他の力代用ひ  
始めよく運轉の功と致すものなり其用ハ  
カハ人力風力水力蒸氣力等カク車碇石等如  
ハ人の手にて之を轉し風車ハ風の力と用ハ水

車ハ水ノ力トウリク動キ蒸氣機械ハ蒸氣ヲ用  
テ運ルウ如ク若ク其力暫ク絶スルアヤハナ  
機械ハおのづから止まるナリ

第百八十二課 機械力ノ用ニ就テ論  
機械ハ力ト省キ時代省クニの形ヲ假如様ト用  
ヒク釘ト打ハ石礫ト用スルニ勝リ車砥石ト  
鑿ト磨ハ平石ヲ用ふるニ由キ鋸ト以テ木ヲ  
既割ルハ斧ヲ以テキスルニ由キ且ツ木材ノ費  
ミ此車鋸ト用ふるバ又手鋸より巧ク且ツ  
持タガおも

第百八十三課 天然ノ機巧ノ論

動物ノ躰ヲ觀ルニ天然自然  
機巧ノ装置ヲ具ふるヲ實  
ホ多ク人ノ手足ハ即チ是桿  
ノ類ホトク兼ク又コウ  
動ク力ヲ具フ橋拱ハ橋ヲ通  
ル合セク成るゴコクノ  
足ノ拱もトト概ヲ合リク成  
ル動物ノ骨ハ即チ自然ノ双  
物あり蟲類ノ中ハ螺旋ヤ



天竺の機巧ノ論

錐こしは器具ぐじはく能た木きや石いしを穿う

つとのものあり

第二十三篇 五官の論

第百八十四課 眼の論

人の身みに五ご官くわんあり視し聴ちやう嗅きゆう味み覚かくの五ごを司つかさどる  
の形かたちを視み了しみすを司つかさどるを兵へいを目めもくくを目め  
るが目め急いそに物ものの色いろを今いまち形かたちを辨わべ日月にちげつ星せい宿しゆく蒼そう  
天てん青せい草そう叢そう花かを見みて了し然しかに何なに物ものとつと見み分わかけ  
形かたちをし得えたり目めの見みへはものを盲もうと謂い  
盲もう者ものハ實じつに衰おとろへるものあり



第百八十五課 聴や言との論

聴きや言こととの論ろん  
聴きや言ことの司つかさどるものハ耳みみなり人ひとハ耳みみありつとや  
小こ物ものの聲こゑ人の言ことを聴きき絲いと竹たけの音ねをも辨わべ  
見み女によハ人の言ことを聴きき其その聲こゑに效あふて遠とほふよく  
ふらやを覺さる生なれかうと耳みみのきあえを啞おや  
つと啞お者の言ことふらやの多おほきさるハ初はめより聴き  
くあやちきさるが故ゆゑなり其その心こゝろに思おもふ處ところハ直ただ  
に其その物ものを指さし或あるハ手て勢なま物もの摸もくく人に令し意いせ  
むるのくなる

第百八十六課 味ふと嗅との論

味あじふと嗅かぐとの論ろん

味ふあや成司る舌と上顎との能き嗅ぐを司るハ鼻の用なきと食ふ處より味成嘗眞を嗅ぐの味ハ各相異あるもの何り醋ハ酸く膽ハ苦く砂糖ハ甘きが如し物の臭も亦然り香しきもの何り臭きもの何り

第百八十七課 覺の論

覺るるやを司るものハ全身の皮膚筋を指し舌の尖と舌物に感し覺ゆる尤甚し既に物を覺ゆる故に都て物の硬軟粗滑冷暖燥濕利

鈍等を知りあり覺るるハ又心に附ても言ふべし頭痛切傷打傷火傷等何れも其苦を覺ゆるやハ身子平和暢快なるときは則ち其呆を覺ゆる

第百八十八課 五官の用何る論

五官を獨り人のもあるもの何れも都て動物も其主人を辨へ識り犬ハ免を嗅ぐ之を逐ひ尋ぬ諸動物も食を食するもの嗅ぐるは凡そ人の知識ハ多く五官より得る眼を思ふと心に生むといへども詞不何ら

補バ之と發するに能くするが如し

第百八十九課 身躰健康の論

飲食にあらずや身を養ふ身躰の健康と保つや  
一やと若し飲食も過せし其身を壞るに至る運  
動ハ健康に益つれども其度を得ずし過不及  
何れハ却て健康を損ふ本なる空氣、健康に  
必用のもの身を清潔にするハ健康不必用の事  
形まどと若し居處の空氣穢く或ハ常の習俗汚  
垢かるや此ハ健康を保つに何とぞし

第百九十課 身に玷缺つる者の論

くの世に生るる警ふるものつり警ふるものあ  
り或背あふとのあて跛脚たりもの何れ斜眼な  
るもの何れ手足彎曲するもの何れ身材長大  
しと偉大夫と呼ぶもの何れ身短くしと矮子  
名はくはるもの何れ若し身躰の玷缺つるもの  
或見ば疾しく之を欺侮するべからば宜しく恤  
助くべしなり

第百九十一課 疾病の論

一身の甲彼此部位其功用宜きに適ふとなし其  
身健康を若し一處に其運動常ならず

あきた則ち病となる力を勞とるや甚と多く  
飲食其直きを得れば吸氣甚と清浄なり今日  
業不神を損する等ハ、な心疾病一む本とな  
る病の人に深過そのあり之を傳添病ヤツ

第百九十二課 死亡の論

身既に死まるとも五官その能を形より生る時  
靈魂あましく物の觸るくシヤ何まけ身必之を  
覺り死まるともハ、靈魂身を離れく身覺えん身  
下塵魂の二つを配せく一人の心を成す身を見  
るべく一々靈魂ハ見るべく一々其身ハ死まへく

一々靈魂ハ死まへく

啟蒙知恵の環大尾

文豪口息の最 卷之三 二七四

# 於菟子譯述

第三大區  
小三ノ區  
四番町一番地

明治五年壬申十月新雕  
同 七年甲戌五月改正

東京書肆

牧野吉兵衛  
山中市兵衛  
蓑田精三郎



